

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

栄

豊橋校区史

35

Sakae







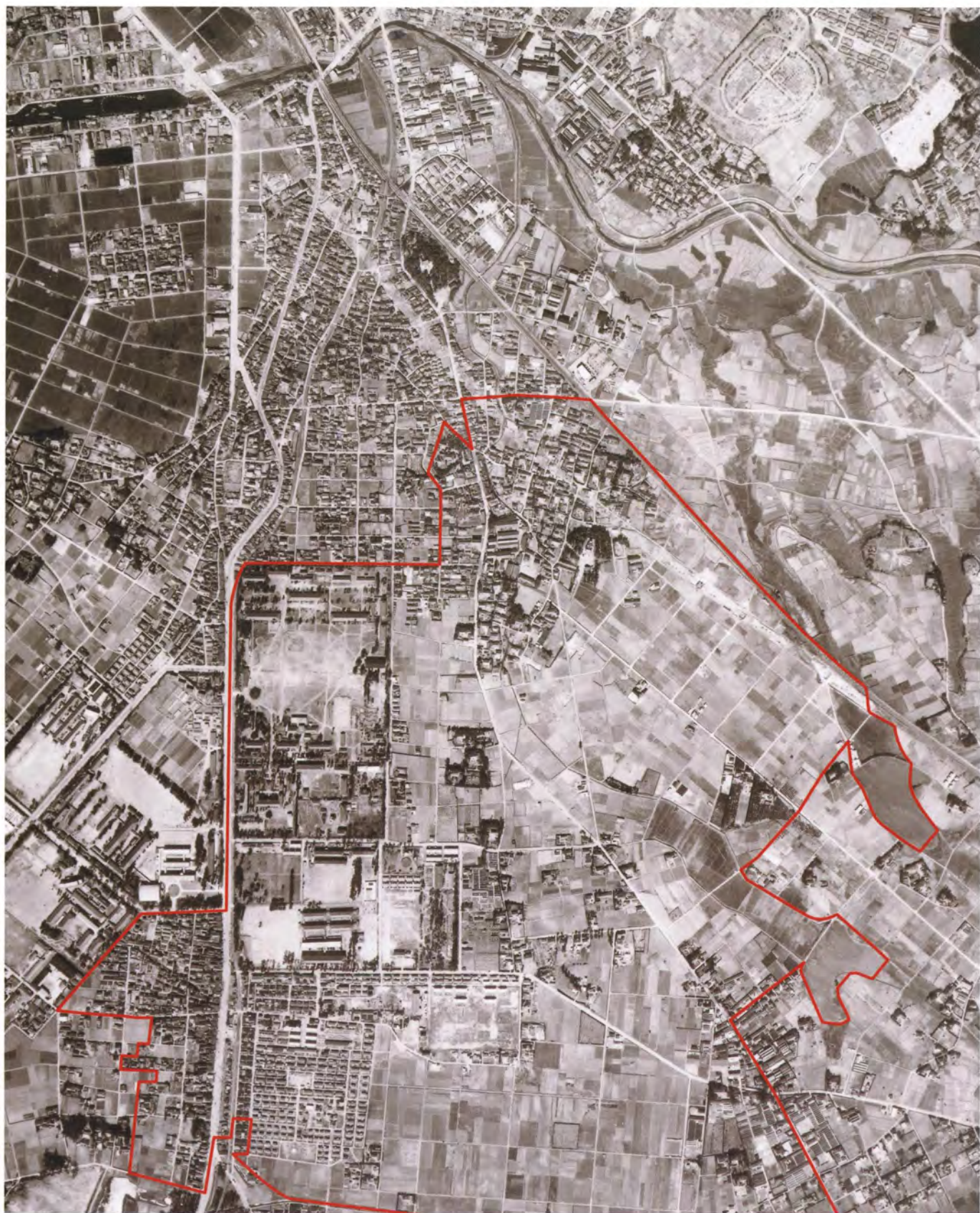
校区のあゆみ

Sakae

栄



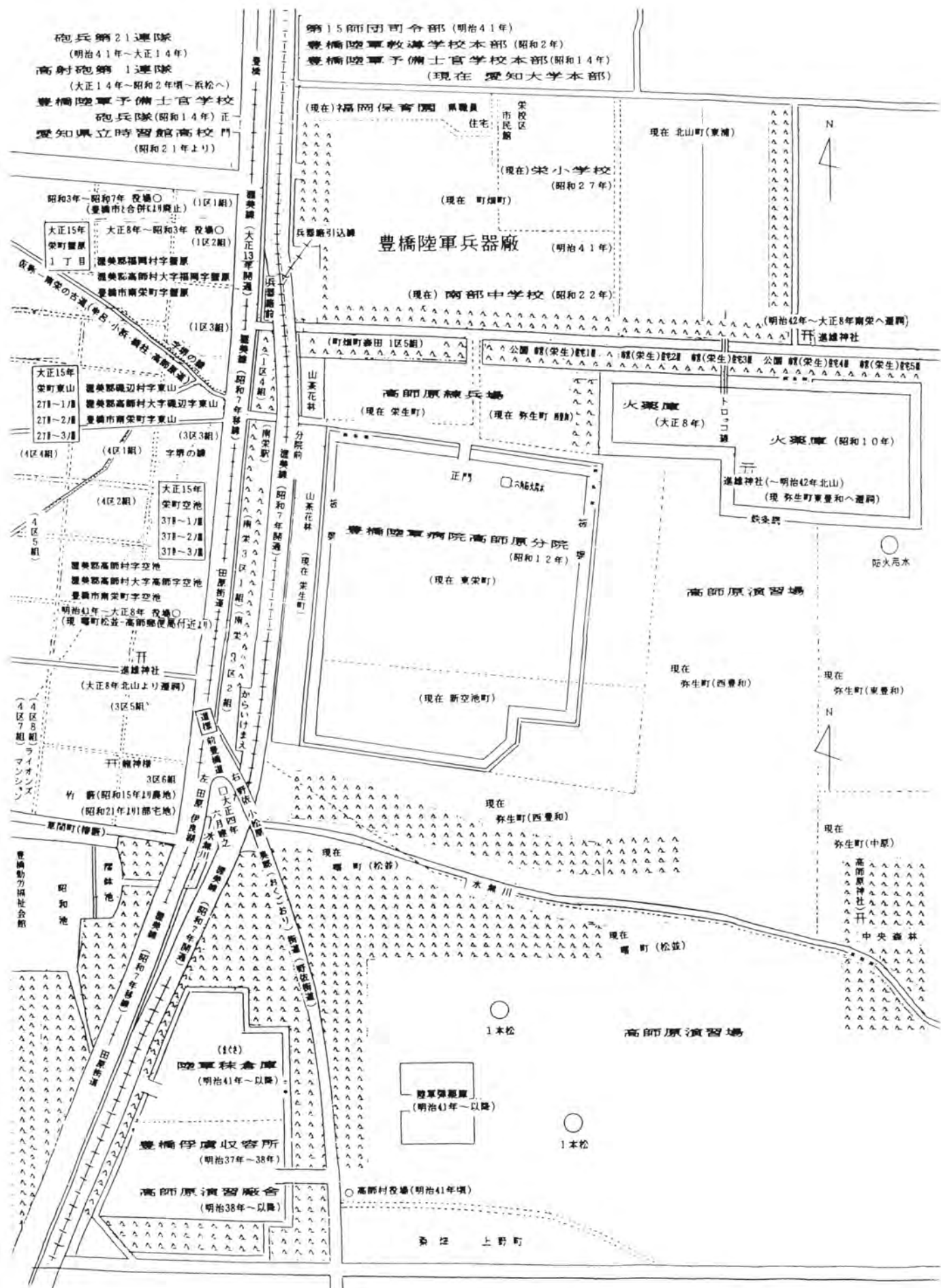
南栄駅と防砂林名残りの松



栄校区付近航空写真 昭和36年(1961) ※線囲いは現在の概略栄校区範囲を示す



栄校区付近航空写真 平成10年(1998)



南栄町付近概念図(昭和20年以前) 縮尺1 / 4000見当

平成7年8月
 共同作図 水口源彦
 森寺 泉

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

平成18年度
栄校区総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものにと終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

昭和27年に豊橋市立栄小学校が開校しました。栄校区の誕生であります。この栄校区は福岡小学校区より分離独立してできた校区であります。

栄小学校区が発足して以来本年で54年の年月が経過しました。当時の校区には旧軍用地や施設が多くありました。戦後の経済や生活が安定すると、急激に住宅地化し、人口が増加し、この地域の開発が進みました。

昭和52年に幸小学校、昭和60年に中野小学校、平成7年にはつつじが丘小学校と校区の分割を繰り返してきました。平成18年の栄校区の状況は、創立以来3度の校区分割をしてきましたが、現在でも1万5千余名の人々が住む市内でも大きな校区となっています。また、保育園から中、高、大学のある豊橋市内では一番の学園地域であるとともに若者の多い活気ある校区となっています。

校区史によって自分たちの住んでいる校区がどのような所に、どんな時に誕生し、現在に至っているかを知るすばらしい企画であります。この「校区のあゆみ 栄」を私たちが読み、その記録を後世に残すことは大変有意義で価値のあることだと考えます。

栄校区、豊橋市のますますの発展を祈念して発刊のあいさつといたします。

第1章 自然と環境	1 栄のひろがり	7
	(1) 豊橋の南部に広がる高師原	7
	(2) 土地のようす	8
	(3) 温かな気候	9
第2章 歴史と生活	1 栄のあゆみ	10
	(1) 大むかしのくらし	10
	(2) 古代から中世へ	14
	(3) 江戸時代の農民のくらし	17
	(4) 軍隊のおかれた明治	20
	(5) 戦争へ大正から昭和	25
	(6) 戦後の復興	29
	2 すずむ住宅化と商業化	33
	(1) 軍隊の街から学園の街に	33
	(2) 住宅化に伴う商店の発展	35
	(3) のびゆく栄	40
第3章 教育と文化	1 福岡小学校へ通ったころ	42
	2 栄小学校の移り変わり	44
	3 ふるさと再発見	48
	4 総代会と校区の活動	51



第1章 自然と環境

1 栄のひろがり

(1) 豊橋の南部に広がる高師原

栄の位置 豊橋市の南部 J R 東海道線・豊橋鉄道渥美線・梅田川にほぼ囲まれた地域が高師原である。その高師原の北部、山田町（一部）・山田一番町・山田二番町・山田三番町・高師石塚町・小松町・北山町・町畑町・南栄町・弥生町・草間町（一部）・牧野町（一部）・曙町（一部）・高師町（一部）が栄校区である。

栄の概観 校区内を通る鉄道としては、J R 東海道線、東海道新幹線及び豊橋鉄道渥美線がある。なお、現在豊橋駅～二川駅間(6.9km)の豊橋駅から2.5km付近に新駅建設を求める官民一体の活動が進められている（豊橋新駅建設促進期成同盟会の活動）。

校区内を通る主要道路としては、国道259号線、県道小松原・小池線、県道石巻・赤根線（豊橋環状線）、県道平井・牟呂・大岩線などがある。しかし、校区内には道幅の狭い道路や行き止まりの道路が多く、住民の日常生活に支障があるため、道路の改良・新設が強く求められている。

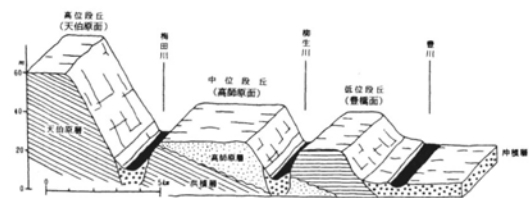
高師原は、標高20～50mのなだらかな丘陵地で、明治41年（1908）の第15師団設置から昭和20年（1945）の終戦まで陸軍の演習場であった。戦後は、住宅難・食糧難に対応するため、旧陸軍施設の住宅への転用や旧軍用地への住宅団地建設・開拓農地化などが推進された。その後も宅地化は急激に進み、平成18年（2006）4月1日現在6,299世帯、15,359人と市内では大きな校区となっている。

また愛知大学、県立時習館高校、県立豊橋工業高校、市立南部中学校、市立栄小学校、福岡保育園などの教育・保育機関は、いずれも旧陸軍の施設跡に建設されたものである。

栄校区は昭和27年（1952）4月に誕生し、現在市内屈指の文教地区といわれる地域であり、この地域特性を活かした文化の薫るまちづくりが都市計画の大きなテーマとされている。

土地の成立 豊橋は、豊川に沿って走っている中央構造線という断層の上にある。そして、豊川の中流から下の川すじは、中央構造線と一致している。川は高い所から低い所へ、また削りやすい所（断層の所は岩がもろくて削りやすい）を選んで流れる。豊川は長い年月をかけて、上流の土地を削り取り（浸食）、運び（運搬）、運んだものを置いていく（堆積）という働きを続けてきたのである。

新城市付近から下流の豊川の両側に広がる平地は豊橋平野と呼ばれて、豊川の上流から運ばれてきた礫（小石）や土砂が堆積して形成された台地とその間にはさまれて砂や泥が堆積した低地で形成されている。



豊川下流の段丘分布と断面図

栄校区は、豊橋平野の中であって、柳生川から梅田川にかけて広がる高師原台地と呼ばれる段丘に位置しているが、この段丘は豊川左岸段丘の一部にあたっており、今からおよ

そ2万～20万年位前の第四紀洪積世の時代に堆積した地層なので第四紀洪積層と呼ばれている。大小さまざまな小石の混ざった礫層、黄色味を帯びた砂の層、赤味を帯びたシルト層などが堆積している。有名な高師小僧は、この地層から産出する。

高師小僧 高師原一帯の広範囲で産出する。地下水に溶けていた鉄分が、地中の植物の根や茎の周りにバクテリアによって沈殿したもので、直径2～5cm、長さ1～10cmぐらいの管状の褐鉄鉱のかたまりである。まれに直径20～30cmのものも見られる。大部分のものは地層中に直立した状態で産出する。

棒状、芋状、樹根状、その他いろいろな形状を示し、中に子供の体形に似た形態を示すものもあって、明治28年(1895)、地質学者によって高師小僧と命名されたとされている。全国各地に産出するが、高師原一帯は、雨で地面が洗われた後などに多く散らばっていたため注目を集め、標識地となった。昔は、これを粉末にして、けがをしたときの止血剤として使われたこともあったという。今の高師原一帯は住宅化・耕地化が進んだため、ほとんど採集ができなくなった。昭和32年(1957)10月、市立高師台中学校(旧愛知県開拓指導所)の校庭南側165㎡(50坪)が産出地として愛知県の天然記念物に指定された。なお、同校の体育館新築工事の際たくさん掘り出されたという。



一方、約12万年前、静岡県との県境付近の太平洋岸を中心とした渥美曲隆運動と呼ばれる地殻運動により、丸く盛り上ったドームを東西に引き伸ばした姿の渥美半島ができあが

った。ドームの南側半分は、太平洋の激しい海岸浸食により海岸線が後退してしまい、現在のような姿になったのである。渥美半島の分水界は、太平洋岸から北へわずか500m付近にあるため、渥美半島の大部分の雨は三河湾へと流れ込む地形となっている。

(2) 土地のようす

海岸線は、昔と今では違っている。それは、おもに気候の影響によって海水面が上がったり下がったりするからである。寒くなると、水分が山岳地帯に氷となって蓄えられ海水面が低くなる。反対に暖かくなると、山岳地帯の氷が溶け海水面が上がってくる。こうした変化は、地球の歴史の中で何度も起こっている。

熱田海進(桑原原図) 15万年前

ウルム氷期最盛期(吉田原図) 2万年前



図A



図B

縄文海進(桑原原図) 6千年前



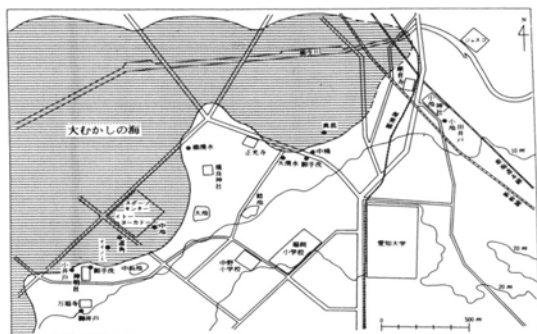
図C

図Aは、熱田海進といわれる時期である。海が東三河奥深く入り込み、この時期に豊橋平野に厚い堆積物ができ、現在の段丘のもとができた。図Bは、ウルム氷期といわれる時期である。氷河の発達により、海水面が現在より140m低くなり、海岸線は太平洋沖に退いていた。図Cは、縄文海進といわれる時期である。海水面が現在より3m程高くなり、豊橋の沖積平野のもとができた。この海進による当時の海岸線付近には、貝塚などの遺跡が残っている。

その後、海岸線が少しずつ退き、豊川の土砂の堆積によって平野が広がっていった。

柳生川近くの沖積平野を1 m位掘るとよしの根や葉が入った砂の層があるそうである。また、海拔3 mくらいの所には、小浜貝塚など大むかしの人々の暮らしの跡があって貝殻が出てくる。したがって、この辺りの沖積平野は、縄文時代には海だったと考えられている。

小浜町から柱第一公園、正光寺の北側から鴨田町、さらに塩満公園を通して柳生川に至る地形は、1 m近く高くなっている。昔の海岸線だったと思われる。この海は入江を形成し、豊富な魚介類がとれたことであろう。近くに清水もわき出ており、暮らしよい土地だったと想像される。



大むかしの海岸線と清水の分布

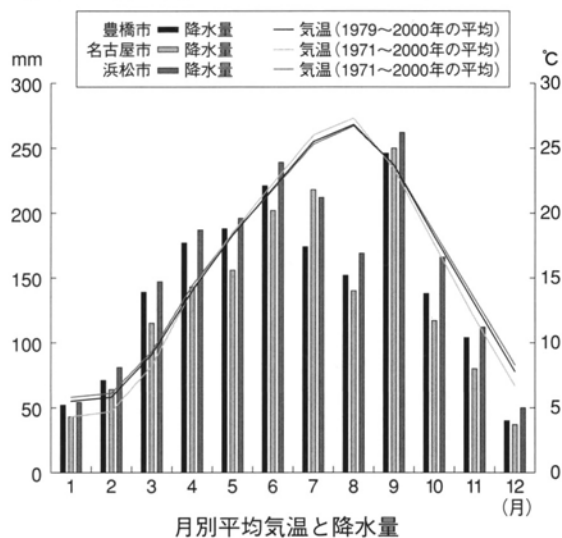
古くからの山田町 山田町に諏訪神社がある。永正元年(1504)ごろの創建と伝えられている。したがって、そのころ周辺に人が住んでいたことは間違いない。一方、高師石塚町に高師石塚古墳がある。この古墳は、古墳時代後期の6世紀後半～7世紀前半につくられたといわれており、そのころ付近に人が暮らしていたと考えられる。

それ以前には、山田町や現在の栄校区内において、人が暮らしていたことを立証するような遺跡は発見されていない。

(3) 温和な気候

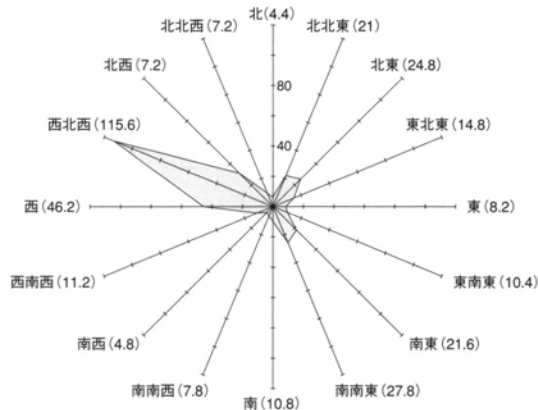
気温・降水量のようす 豊橋地方は表日本式気候で、四季温暖といえる。

豊橋の平成16年(2004)までの過去29年間における最高気温は平成13年8月14日の38.6℃、最低気温は昭和59年(1984)2月12日の-6.4℃で暑さ寒さはかなり厳しい。しかし平均気温が5℃以下になることはなく、最も暖かい月と最も寒い月の平均気温の差もそれほど大きくない。年間の平均気温も15.8℃と高く、1年を通じて植物の生育できる常春の地といえよう。



月ごとの雨量の変化は、夏に多く、冬に少なくなっている。

風の様子 豊橋地方の主たる風向は西北西で秋から冬にかけて多く吹く。夏は南寄りの風が吹く。月別平均風速(平成11～15年の平均)は、4.4m(1月)～2.5m(7月)で、年平均3.3mとなっている。



豊橋の風向別年間日数(1999～2003年の平均)

第2章 歴史と生活

1 栄のおゆみ

(1) 大むかしのくらし

文化のあけぼの 旧福岡校区（栄校区誕生以前の当地域は福岡校区に含まれていた）において、初めて人類が住み始めたのはいつごろだろうか。

文字の無い大むかしのことを詳しく調べるのに、考古学という学問がある。考古学者たちの調査・研究によると、地質学でいう更新世（洪積世、約200万～1万年前）には、この日本に確かに人類が生活していたことが知られている。

東三河における最初の人類として、牛川町の石灰岩採掘場において、今から5万～8万年前の旧人に属する人骨が発見され、牛川人と命名された。牛川人が住んでいたのは旧石器時代（今からおよそ1万3千年前まで）で、そのころの人々の生活は、もっぱら狩猟・漁労・採集に頼っており、磨製石器を知らず、打製石器だけが使用されていた。

旧石器時代には、氷期（寒冷期）と間氷期（温暖期）が数万～数十万年ごとに繰り返されていたが、縄文時代（約1万2千～2千4百年前）に入ると、気候も温暖となり動植物も

地質区分	年数	人 類	遺跡
完新世 (沖積世)	1万	新人	萩平遺跡 岩宿遺跡
更新世 (洪積世)	3万	旧人	野尻湖遺跡
	15万	ネアンデルタール人	加生沢遺跡 馬場塚A遺跡
鮮新世	80万	原人	高森遺跡
	400万	猿人	
		アウストラロピテクス	

人類進化の過程

生育しやすくなって種類も増えていった。

現在のところ、旧福岡校区に人類の足跡の証拠として残されている最古の遺跡は、小浜貝塚（小浜町、縄文前期～晩期）だといわれている。この貝塚は、現在の海岸から2km以上も離れているが、今から約6千年前の縄文海進時には海水位が今より3m以上も高く、近くまで海が入り込んでいて、当時の人々が魚介類を採取して暮らすのに都合のよい場所であった。小浜貝塚からは、縄文前期～晩期にわたる土器、土器片のほか、前期末のころの人骨（横臥屈葬）が出土した。



小浜貝塚出土の中期の土器

貝塚とは、大むかしの人々が食べ捨てた貝殻などの積もった所である。大むかしの住民は、貝や魚や獣や果実をとって食べており、不用物はごみ捨て場に捨てた。しかし、今日残っているものは貝殻が多く、他に獣骨や魚の骨のほか、そのころ用いた器具などが含まれる。貝殻が比較的たくさんあるので貝塚と名付けられたのである。

草創期	約12,000年前～
早期	約 8,000年前～
前期	約 6,000年前～
中期	約 5,000年前～
後期	約 4,000年前～
晩期	約 3,000年前～約2,400年前

縄文時代の時期区分

縄文時代とは、縄文式土器が使用されていた時代をいう。縄文式土器は、ろくろを用い

ず、露天でたき火をして焼いた素焼きで、焼成度が低いので、黒褐色や赤褐色をしている。

縄文時代には、土器、石器、弓矢などが使用されていた。土器の使用は、それ以前の石器しか知らない時代の人々と異なり、その生活内容を格段に豊かにさせた。食物を収め貯えたり煮たりできる土器は、生活にきわめて有用な道具であり、これの出現により、以後の長い文化の発展の原因となった。また、狩猟の道具に弓矢が発明されることにより、獣の捕獲量は急に増えた。

縄文時代の遺跡は、おもに海や川に面した南向きの住居がつくられた洪積台地と、近くにわき水のある場所であったことが分かる。さらに、狩猟、漁労、採集のしやすい場所が一般的である。縄文時代の人々の暮らしは、さまざまな遺跡や遺物の調査から、次のようなようすが浮んでくる。山野に住む猪・鹿その他の獣類を追いかけ、海・川に住む魚・貝類をとり、各種の若葉・若芽・くり・くるみ・やまぶどうその他の果実、山芋・ゆりの球根などをとっていた。植物性食料の貯蔵、丸木舟を使つての協同漁労、犬をかり出しての協同狩猟、動物の歯・骨や角などの道具への加工、調味料としての塩の利用、生活物資の交易、犬や野生動物の飼育なども行われていた。人々が採集してきたくりややまぶどうの種を家の周りに捨てたとき、その中に発芽し、生育して結実するという事実も経験したであろう。山野にある山芋などを根のまま採取し、これを家の周りに移植させることによって再びその地に行かなくても食料として利用できることも知ることになったであろう。そして、家族単位の竪穴住居が小さな血縁者の集落をつくり、平等な共同体を営んでいた。

稲作の始まり 日本が縄文文化に停滞していたころ、中国においては、すでに優れた文化が展開していた。そして、稲作や金属器（青

銅器・鉄器）、土器の製作技術ばかりでなく、装身の方法や埋葬のような習俗、精神的な面においても、大陸の影響を西日本から東日本へと順次受けることとなった。このように、縄文文化の伝統を持ちながら大陸の影響のもとに新たな生活に展開していった今から2千4百年ほど前の文化は、弥生文化と呼ばれている。

日本の稲作の起こりは、福岡市板付遺跡の調査などから、弥生時代ではなく、それより前の縄文晩期であることが分かる。

豊川流域の稲作の歴史は古く、唐古（奈良県）・登呂（静岡県）の水田遺跡と肩を並べるほど古い瓜郷遺跡（弥生中期～古墳初期）がある。この遺跡は、豊川河口付近の低湿地に位置しており、近くの台地上の森林で狩猟をし、河口の浅瀬で魚介類をとり、周辺の低湿地で稲作を行っていた所であることが、発掘調査や出土品から明らかになった。この遺跡からは、水田跡は発見されなかったが、炭化した粳・稲穂を収穫するときに使用する石包丁・鍬や踏鋤といった木製農耕具・土器類・骨角器・磨製石器・漁労具・木製弓・木の実などが出土している、また、鳥・獣・魚を含む貝塚もある。



瓜郷復原住居

柳生川沿いの湿地と暮らし 柳生川沿いの湿地においても、瓜郷遺跡と同じころ、稲作が取り入れられていたことが、橋良遺跡（柱三番町、弥生中期）の発掘調査や出土品から分

かる。この遺跡からは、竪穴住居跡やはまぐりを中心とした小貝塚・磨製小型石斧・打製石鏃（弓の矢じりとして用いられた石器）・土器の長床式のつぼ・高坏・台付かめなどが出土している。

弥生時代の柳生川沿いにおいては、橋良遺跡周辺の湿地帯以外、例えば小池方面や下流の小浜方面でも水田に適した場所は無かったようで、遺跡も見つかっていない。

柳生川沿いの当時の弥生人の生活は、発掘調査や出土品から、近くの森林で狩猟をし、海や川で魚や貝類をとり、野生植物の若葉や若芽・各種果実・木の実・球根類を採集し、栽培耕作を行い、周辺の低湿地で稲作を行うというようなものであったと考えられる。

古墳時代 稲作が普及し、農具や武器に金属が使われだすと、人々の暮らしは大きく変化していった。米が多くとれて人の多い豊かな集落と、そうでない貧しい集落とができ、その間で水や土地の奪い合いなどから争いが起き、強い集落は弱い集落を従え、小国家（集落共同体）ができるようになった。

4世紀になると、中央集権化の波がおしよせ、集落共同体の統合が広範囲になり、4世紀中ごろ大和朝廷の統一が行われた。弥生時代が発展的に解消した後の3世紀末から8世紀初めころまでを高塚式古墳を基準として古墳時代という。古墳の種類は、盛り土の外形から前方後円墳、方墳、円墳を基本形とするが、変形もある。

東三河地方で最古の古墳は、浪ノ上第1号古墳（牛川町、古墳前期）で、その後6世紀ごろまで各地に前方後円墳がつくられた。

前方後円墳は、形やつくり方、副葬品などがよく似ていて画一的であることから、大和王権がリーダーシップをとった結果と考えられている。

石巻本町の馬越長火塚古墳（6世紀後半、

全長64m以上）や牟呂王塚古墳（6世紀末～7世紀初、長さ約40m）の前方後円墳では豪華な副葬品の中に馬具が含まれており、高い身分の者の古墳であると考えられる。

大規模な墳墓は、鉄器の使用・耕地の拡大・灌漑技術の発達など、その時代の本格的農業生産への流れに即応し、生産量の増加による経済力を身につけた地方豪族が、一般農民との身分の差を明らかにし、その事実を後世に伝えようとしたものであるといえる。

豪族の台頭とともに、一般民衆の力も伸びてきた。6世紀から7世紀にかけて10数mほどの大きさの円墳が多数つくられるようになったのである。複数の人骨を取めた家族墓と考えられる円墳も見つかっている。

栄校区における古墳としては、高師石塚古墳（古墳後期、未発掘）がある。墳丘の高さ約2.7m、直径約13mの円墳である。小池町から柳生川方面が見渡せる位置にあり、この地域の豪族の墓だと考えられる。その他、いくつかのこの地方の古墳についての言い伝えが残されている。



高師石塚古墳

穂国 大化元年（645）の大化改新以前においては、東三河地方は「穂国」と呼ばれ、穂国造が任命されていた。東三河のシンボルとしての本宮山が「穂」の由来であるとされ

ている。

徳国造に関しては二つの文献がある。一つは歴史書である「古事記」（開化天皇の条）に「朝廷別王者三川穂別之祖」とあり、徳国造が朝廷別王であったことが記されている。もう一つは「国造本紀」（雄略天皇の条）に「徳国造……葛城襲津彦4世孫、菟上足尼……」とあり、5世紀後半から6世紀ごろ菟上足尼が徳国造に任命されたと記されている。なお、小坂井町の菟足神社は、菟上足尼（徳国の初代国造とされている）をまつている。

この地方が、徳国として大和朝廷に組み込まれた時期については、資料的に少なく不明な点が多いようであるが、巨大古墳の出現状況から考えると、5世紀以降といえるであろう。大和朝廷は、地方の豪族を国造と呼ぶ地方官に任命して地方の支配を進めたが、当地方の豪族も徳国造として任命され支配されたのである。

大宝律令と三河国高師郷 大化元年中大兄皇子と中臣鎌足が中心になって、従来の氏姓制度による皇室・豪族の個別的支配権を否定して、中国の律令制度にならった公地公民制に基づく中央集権的・官僚制的支配体制を打ち立てようとする一大政治改革が実行された。そして、翌年新しい政治方針が出され、「国」「郡」などの地方行政区画の整備が実施されて、この地方は三河国（西三河）と徳国（東三河）が合併されて、新たに「三河国」となった。この新しい三河国の国司が政治を行う役所である国衙の所在地（国府）は、現在の豊川市白鳥町総社付近といわれている。

大化改新の基本方針として大化2年に、①皇族・豪族の私有地・私有民の廃止 ②京師・国・郡・里などの地方行政組織の確立 ③戸籍の作成と班田収授法の実施 ④租・庸・調その他の統一的な賦課制度の施行、という4項目が示されたが、この改新の目標が遂行されたのは、実質的には天武天皇が天武10年

(681) 以降に制定した飛鳥浄御原律令を大宝元年（701）に拡大整備させた大宝律令の制定まで多くの日数を要した。

新しい三河国の旧徳国は、三つの郡に分けられ、その一つは渥美郡、他の二つの郡は、宝飫郡（後の宝飯郡）と八名郡である。渥美郡のうち、豊橋市域には、高蘆郷（高師から天伯・二川）、磯部郷（老津・杉山から太平洋に至る地域）、幡太郷（主に羽田町）、渥美郷（主に八町付近）の4郷があった。

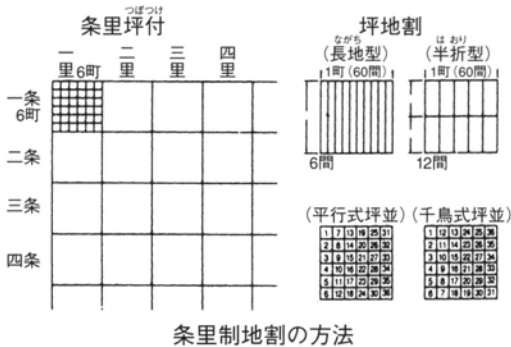
「郷」は、律令制の地方行政区画の最末端組織で、50戸1郷が原則である。郷を構成する戸は郷戸と呼ばれ、班田収授や税の徴収の単位とされた。郷戸の規模は、10人前後から100人以上に及ぶものなど大小さまざまで、夫婦親子のほか、いとこやおい・めいや寄口の家族、奴婢、家人などを含んでいた。

寄口=戸籍上の一つの部類で、個人又は家族ぐるみ異姓の戸籍に編付したもの。律令国家の給付と収奪のアンバランスにより絶戸した戸の家族や没落した戸のものが富裕な戸に引き取られたもので、戸主の同族・女系縁者・非血縁者など、戸主との関係は雑多である。当時の重要な労働力になっていたといわれる。**奴婢**=古代の賤民で奴は男子を、婢は女子をいう。律令制度のもとにおける賤民には陵戸・官戸・家人・公奴婢・私奴婢の5種があったが、このうち公私奴婢は最も身分的に低いものとされていた。公奴婢は官有、私奴婢は私有の奴隷であって、家人以上が家族生活を許されたのに対して、公私奴婢は許されず、良民の3分の1の口分田を与えられ、売買・譲与・質入は所有者の自由であった。その数は全人口の5～10%とみられている。

陵戸=天皇、皇族の陵墓を守ることを世襲の職業とするもの。身分的には賤民の中で最も良民に近く、良民と同額の口分田を与えられ

だが、結婚は許されず、戸籍も別に作られた。官戸＝宮司の雑役に駆使された。官奴婢（公奴婢）よりは身分的に上位にあり、一戸を構えた。良民と同額の口分田^{くぶんでん}を得たが、収穫稲はすべて官納し、衣食は別に官給された。家人＝奴婢と同様相続の客体とされ、良民の3分の1の口分田を与えられた。家人は家族・私業を営むことを認められ、原則としてその売買が禁止されるなど奴婢よりも高い地位の奴隷である。公奴婢＝官奴婢ともいう。律令社会の最下層賤民である。奴婢のうち、個人所有の私奴婢に対して官有の奴婢をいう。大化以前の朝廷所有の奴婢の系統をひき、諸官庁に属した。私奴婢＝官有の公奴婢に対して私有の奴婢をいう。土地と並んで財産視され、売買の対象となった最も本格的な奴隷で、戸を構えて生活することは認められず、所有主のため雑役に従っていた。良民の3分の1にあたる口分田を与えられたが、納税の義務は無かったので、彼らを所有していた豪族などには、きわめて有利であった。

律令制のもとで水田の開発が進んだことを知る手がかりとなるものに条里制の遺構がある。大化改新による公地公民制と班田収授法^{はんてんしゅうじょうのほう}に基づき、農民には一定の口分田が与えられ



条里制地割の方法

た。そのため、各地の水田に適した土地は、一定の広さにより土地割がされたのである。この土地割が条里制である。条里制における

地割については、一辺の長さ6町（約654m）四方の一区画を里または坊といい、この区画を南北方向、東西方向にそれぞれ広げていき、南北方向を一条、二条、東西方向を一里、二里と数える。6町四方の区画（里）は更に縦横一町（約109m）ずつに区切って6等分し、溝や畦などで坪と呼ばれる36の区画に分ける。そして里の一隅から1坪、2坪・・・と36坪まで数えていく。

したがって、耕地の所在地は「何条、何里、何坪」で明示することができる。さらに1町四方の中は10段に区切られ、半折型や長地型に並べられていた。

豊橋地方における条里制の遺構は、耕地整理などでほとんど破壊されてしまっているが、賀茂、下条、大村地区などでは、区画整理以前の地図でそれが確認できる。

班田収授法は、田地の集中を防ぎ、民生を安定させるとともに、国家の租税収入確保を目的とするものであったが、人口の増加と貴族・寺院の田地の増加に伴って分け与える口分田が不足することになり、養老7年（723）に三世一身法^{さんせいいつしんのほう}などで対応したが効果がなかったため、天平15年（743）に墾田永世私財法^{こんでんえいせいしさいのほう}を出すこととなり、それが原因で班田収授法はくずれ、私的大土地所有制である荘園が増え続ける結果となった。班田収授法は、9世紀以後律令制のゆるみにつれて実施困難となり、延喜2年（902）を最後に廃絶した。

(2) 古代から中世へ

伊勢神宮領 律令制度が行き詰まり、三世一身法に続き、墾田永世私財法が発令されると、富裕な貴族や、有力な寺社はこぞって新田の開発を行い私有地（荘園）とした。さらに、これらの荘園が、不輸不入の権（租税を納めなくてもよい権利と役人の立ち入りを拒否できる権利）を獲得すると、地方の豪族は所有

する土地を、国司の収奪から逃れるために貴族や寺社に寄進した。

豊橋地方の荘園は、この寄進地系荘園が多かったとされる。なかでも、朝廷の保護が厚く、強い勢力を持ち、地理的にも近かった伊勢神宮領（神戸・御厨・御園と称される）が数多くあった。

例えば、飽海神戸（現在の八町付近）は、平将門の乱の平定を祈願した朝廷が御礼として献上したものであり、安久美神戸神明社で行われる鬼祭はこの神領の繁栄と安泰を祈願して始まったと伝えられる。

校区の近くでも、大津神戸（老津町）、橋良御厨（橋良町）、高足御厨（高師町）などがあった。



豊橋周辺の荘園

豊橋から渥美半島一帯は、伊勢とは海の対岸であり、船を使つての往来が盛んだった。梅田川河口付近から田原にかけては神宮へ納める米の積み出し港だったようである。

その後、鎌倉時代になつても、幕府の伊勢神宮に対する保護は厚く、いくつかの御厨から地頭職を停止させ、地頭の取り分を放棄させたり、警察権さえも神宮に与えられたりした。

そのため他の地域に比べ、武士の横暴は比

較的少なく、農民にとっては暮らし易い地域だったようである。

武士の出現と領地 荘園や寺社領などが増加してくると、中央の朝廷の力は弱体化し、地方政治を荒廃させ、国司の悪政はますますひどくなった。豪族間の土地を巡る争いも激しくなったが、朝廷にはこれを取り締まる力は無かった。

そのため、荘園も、寺社領も一族郎党を組織化し、私兵を育て自衛に努めた。しだいに、個々の武士団は、地方在住の皇族や貴族をリーダーとして、より大きな武士集団をつくりあげていった。

やがて、源頼朝が平家を滅ぼして政治の実権を握ると、朝廷に守護・地頭を設置することを認めさせた。頼朝に従う武士（御家人）の多くは荘園の荘官、公領の郡司、郷司などであったが、地頭職を補任されることにより領主としての地位を認められた。頼朝は御家人に領地（御恩）を与える代わりに忠誠（奉公）を誓わせ、主従関係を結び、封建制度をつくりあげた。

しかしながら、地頭職は、もともと現地を管理し、年貢を徴収し、領主に納めることと、領内の警察権を持つものであったが、この権利を乱用し、年貢を横領したり、加徴米を付課するなど、領主や荘民を困らせるものが後を絶たなかった。承久3年（1221）幕府の専横に不満を募らせた後鳥羽上皇が挙兵した承久の乱を幕府が制し、朝廷側の所領を没収し、新たに地頭職を御家人に与えた。

これにより幕府の全国支配は完成したが、その後も、幕府権力を背景とした地頭の横暴は治まらず、さまざまな理由をつけて年貢を滞納、横領し、荘園領主と地頭との間で紛争が頻発した。その解決方法として、毎年一定額の年貢納入や、荘園の管理を請け負う地頭請や、荘園の一部を分割して地頭の領地とし

て与える下地中分したじちゅうぶんなどが行われたが、地頭の侵出を加速させる結果となり、荘園制度崩壊を進めることとなった。

人々の信仰 平安末期、貴族は没落し、盗賊や悪人がはびこり、世情不安な中、人々は、生命や財産の保全に心配をしながら毎日の生活を送っていた。また、来世の極楽往生を願う末法思想が広く信じられるようになり、人々は心のよりどころを求めている。

鎌倉時代になり、法然ほうねん、親鸞しんらん、一遍いっぺんなどが一般大衆にも理解しやすい新しい仏教を説きはじめると、人々の心をとらえてしだいに広がっていった。

ただ、村には、昔からの鎮守様があり、自然の気候などに左右されやすい生活を営む農民にとっては、村全体の安全な生活と、五穀豊穡を祈るよりどころとなっており、村としてのまとまりのための中心となっていた。

戸部塚と十三本塚悲話 応仁の乱の後、室町幕府の力は衰え、各地に群雄が割拠し戦国時代となった。有力武将は、近隣の武将たちをその勢力下に治め、大きな力をつけ天下統一の機会をうかがっていた。駿河の今川義元もその一人で、遠江ととおうみ、三河の3国を傘下に収め、尾張の東部まで勢力を伸ばしていた。一方、尾張には織田信長が、新興勢力として力をつけ、今川領を侵そうと争っていた。

永禄3年(1560)、今川義元は、大軍を率いて京を目指して進攻した。しかしながら、桶狭間の戦いで織田信長に敗れて戦死し、その野望はついでた。

この前後の、今川、織田の争いにまつわるエピソードで、校区近隣にゆかりの深い史跡が残っている。

一つは、柱九番町にあった戸部塚である。現在では、塚石もなく、言い伝えとして残っているにすぎないが、無実の罪で処刑された戸部新左衛門が埋葬された所だったとされて

いる。

戸部新左衛門は、今川義元の家来で、尾張笠寺の城を守っていたが、織田信長が、東へ勢力を伸ばしていくためにはきわめて邪魔な存在だった。弘治3年(1557)、信長は、新左衛門が信長にあてて出したような偽手紙を作り、策を用いて義元に届けさせた。これを見て、内通していると怒った義元は新左衛門を駿河へ呼び、吉田城下まで来たとき、これを捕らえて切腹させた。冤罪で殺された新左衛門を哀れみ、村人たちが造ったのが戸部塚であると伝えられている。

もう一つは、十三本塚である。国道259号の高師口交差点の西南角に建っている供養塔(大乘抄典の碑)、富本町にある姫塚、小池町にある地藏尊が、殺された人たちの供養のために、後世になって造られたとされている。今川義元が桶狭間で横死したのち、今川家は息子氏真うじまねが家督を継いだ。義元ほどの器量がなく、配下の東三河の武将たちは、今川家に人質を置きながら、勢力を伸ばしてきた織田信長や松平元康(のちの徳川家康)方にひそかに寝返っていた。

当時の慣わしで、配下の部将は、忠誠の証しとして有力武将に、妻や子供を人質として預けなければならなかった。徳川家康が幼少の頃から今川家の人質になっていた話は有名である。

配下の寝返りを知った氏真は、永禄4年吉田城城代小原肥前守鎮実おはらひぜんのかみしずざねに命じて、龍拈寺山門前で、吉田城内に預かっていた人質十数名はりつけを磔のうえ、串刺しにして殺してしまった。

犠牲となったのは、ほとんどが東三河の諸将の妻や子供で、戦国の世の厳しく悲しい話として今に伝えられている。

なお、大乘抄典の碑は江戸時代になって建てられ、当初はもう少し北にあり、その後県道石巻・赤根線(豊橋環状線)の拡幅かくふくのため

一時富本公園に移されたが近年現在の所に戻された。地藏尊は、いつごろ造られたものか、また犠牲者の供養のために造られたかも不明だが、この一帯が龍拈寺の寺領だったことから、後年人質の霊をなぐさめる地藏尊としてまつられるようになった。姫塚は富本町地内にあり、処刑された人質が葬られている場所と伝えられている。

この十三本塚の名称は、犠牲者が11～14名だったことから、当時全国的風潮であった、塚を13基つくる「十三本塚信仰」にあやかりこの名がついたといわれている。

また、現在の富本町の町名は「十三本」

を「トミモト」と読み替えてつけられたものである。

森田新田と進雄神社 すさのお 松平元康は、永禄5年に今川氏との関係を絶ち、織田信長と同盟を結び、名前を家康と改名し、東三河に領地拡大を目指した。家康と今川家の吉田城城代小原鎮実との間で、幾度となく戦いが繰り返されたが、永禄8年に和議が成立し、家康が吉田城を占領し、続いて田原城を手中にし、東三河を完全に掌握した。

家康は、吉田城を腹心の酒井忠次に与え、近辺を統治させた。忠次は、軍事のみならず、内政にも力を注ぎ、豊川の堤防の改修、灌漑堰かんがいせきの設置など、流域の治水にあたりとともに、豊川に土橋を架けた。一方で新田の開発も奨励し、横須賀の新田などを開発した。忠次の治世のもと、吉田は商工業とも発展し、東三河地区の中心地となった。

この酒井忠次の時代に、現在の南部中学校一帯に森田新田が開発され、永禄11年（1568）



大乘抄典の碑

に完成したという説がある。

しかし、進雄神社むなふだの棟札むなふだなどから類推すると森田新田の開発は江戸時代になってからで、完成したのは、城主久世大和守重之くぜやまののかみしげゆきの時の元禄11年（1698）と思われる。なお神社境内の由緒誌も元禄11年とされている。

この森田新田の開発により、栄校区としては、山田町界わいと小松新田に次いで人が住むようになった地域と考えられる。

そして、住民たちは、村の鎮守として現在の弥生町字西豊和の地に牛頭天王ごずてんのうをまつる社を造り、五穀豊穡や平穏な暮らしを祈った。

その後明治時代になって、神仏分離令により牛頭天王に替わって進雄命すさのおのみことをまつるようになり名前も進雄神社と改めた。

ところが、この辺りが陸軍用地として使われることになり、二度の遷座を経て現在の地からいけ（南栄町空池）にまつられるようになった。



進雄神社

(3) 江戸時代の農民の暮らし

吉田藩と政治 豊臣秀吉の時代、吉田は、徳川家康をけん制するための戦略拠点として、腹心の有力部将である池田輝政が配置され、その所領は、東三河全域と西三河、遠江の一部に及び15万2千石という大きなものであった。

しかしながら、江戸時代になると、当然のことながら大大名を配置する意味がなくなり、細かく分割統治されるようになった。

しかし、東海道の要衝の地である吉田藩は、

譜代大名の松平家清が配置され、当初3万石の小さな領地だったが、江戸中期、大河内松平家が藩主となってからは7万石に加増され、明治維新までこれを維持し続けた。

初代の松平家清から22代にわたる歴代の藩主は、幕府の信任が厚く、老中、奉行など幕府の要職に就くことが多かった。

藩政の仕組みは、幕府の職制にならっていて、幕府の老中にあたる家老、若年寄にあたる中老、それと小姓頭、用人の四職を「御席」と称して最高首脳部を構成した。小姓頭、用人は藩主の側近の御用を務め、老中、中老が、軍事、行政、財務などの政務のさいはいを振るった。

政務を担当するのは表方と称し、家老、中老のもとで「番方」と「役方」に分かれた。番方は軍事的な勤務を担当し、城代、城番頭、籾奉行、鑓奉行などが属した。役方は、非軍事的な勤務を担当し、町奉行、郡奉行、郡代など町民、農民を支配する役人と、勝手掛、勘定奉行など財務を担当する役人が属した。

江戸時代は平和が続き、番方の仕事は城内外の警備などが中心で、おおむね閑職であったが、藩の財政は、農民から徴収する年貢に依存していたため、役方の民政や財務の役人の重要性が強まっていった。

郡奉行、郡代の支配のもと、村には庄屋、組頭、百姓代の村方三役といわれる村役人が置かれ、村中の年貢を取りまとめて領主に納める任務を行っていた。年貢は、農民一人ひとりに対してではなく、「年貢村請」といって村全体に賦課され、村方三役が中心となって村として責任を持って上納する仕組みになっていた（村方自治）。他にも農民を統制、支配するための仕組みとして「五人組制度」や「寺請制度」があった。前者は、農民をグループ化して組内での租税の滞納、異教徒・犯罪人の有無、さらには日常生活にいたるまで

相互監視させ、連帯責任を負わせるものであった。後者は、逃亡、逃散の防止や他領への奉公禁止など耕作人口流出防止とキリシタン禁止の徹底のため、すべての人がいずれかの寺院に属するよう定めたものである。

苦しかった村の暮らし 前述のとおり、江戸時代の経済の基盤は農業であり、農民が納める年貢が藩の財政を支えていた。そのため、士農工商といわれるように、農民は武士に次ぐ身分とされていたものの、「百姓は生かさず殺さず」（徳川家康のことばとされている）の政策のもと、衣食住にわたり厳しい制約を受け、貧しく苦しい生活を強いられていた。

税は、田畑の生産物への年貢をはじめ、海や山の産物にも課せられ、さらには、土木工事、助郷などの労働賦役もあるなど多岐にわたる重いものだった（詳細後述）。年貢の税率（免）は「五公五民」とか「四公六民」といわれるように田畑の収穫量の半分近くを納めなければならず、しかも、すべて米で納めることが原則だった。そのため、農民は日常生活において、米を常食とすることはできず、稗、粟、豆類などの雑穀を主食とせざるを得なかった。ひとたび天災や飢饉に見舞われると、たちまち年貢は滞納され、借金は増大し、なかにはなけなしのわずかな土地を手放して、水呑百姓に転落するものもあった。藩からのお触れである「五人組帳前書」には、日常生活の在り方まで指示されていて農民の生活ぶりをうかがうことができるので、清須新田五人組帳からの要約を紹介する。

- ・病気などで田畑の耕作ができない場合は村中で助け合って耕作し、荒地にしないようにすること。
- ・常日頃から、飢饉に備え豆類や芋の葉などを備蓄しておくこと。
- ・衣類は、男女とも木綿以外は着てはならない。

- ・嫁入り道具、祝儀はできるだけつつましくし、おおげさな祝宴もしないように。
- ・捨て子は絶対してはならない。

年貢と助郷 農民に課せられる税の主なもの、田畑の年貢であり、これを「本途物成^{ほんともものなり}」といい、米納が原則であった。他にも海や山の産物に課せられる小物成、農業の合間の副業に課せられる運上、土木工事や助郷などの労働賦役である夫役など多種にわたりきわめて過酷なものだった。

年貢（本途物成）は、村高（あらかじめ定められた標準収穫高）に一定の税率（免）を掛けて計算された。当初は、毎年収穫前に、藩から役人が実り具合を調べに来て、その年の税率を決める検見法^{けみぼう}で行われていたが、吉田藩では享保15年（1730）ごろから過去数年の平均収穫量を基礎として、その年の豊凶作にかかわらず定額を課する定免法^{じょうめんぼう}に変わっていった。しかしながら、10年程で検見法に戻り江戸時代末期まで続いた。税率は、ほぼ「四公六民」と厳しいものだった。

農民を苦しめ、農村を疲弊させたもう一つの要因は、助郷制度だった。

二川宿（二川町）には、旅人やその荷物を運ぶための人馬を用立てる問屋場があり人足や伝馬を常駐させていた。しかしながら大名や公家などの特別な大通行の場合には不足したので、臨時に近在の村に割り当て、不足分



修復された現在の二川本陣

を補った。これが助郷制度である。

当初は、あくまでも臨時の補充的なものだったが、参勤交替が制度化されるなど街道の交通量の増加に伴い、しだいに恒常化され、元禄7年（1694）には東海道の宿駅の助郷が確定した。

二川宿では、近隣12か村が定助郷（定数の人馬の補充を義務付けられた助郷）に指定され、高足村（現在の栄校区、高師、野依、植田、本郷各校区などにあたる）もその一つであった。

助郷の負担割合は、村高から一定割合が控除されたものが助郷高とされ、助郷高100石につき2人・2匹の割合で人馬役が課せられた。高足村の場合は、村高1,873石に対し助郷高は1,074石だった。助郷により農村の受けた打撃は大きく、本来の仕事の農作業が滞り、不作凶作の要因にもなり村は困窮し、疲弊していった。その理由は、第一に、参勤交替の時期が春秋の農繁期に重なることである。第二に、徴用される馬は老馬であってはならず、人は15歳から60歳までに決められていたことであり、更には助郷村には川除普請^{かわのぞきぶしん}（川の治水工事）、橋普請などもしばしばあった。**減租の訴え** 重税によりぎりぎりの生活を強いられていた農民は、ひとたび天災や飢饉に見舞われると、たちまち年貢は滞納し、借金が増大した。その都度、減租の嘆願は出されたが、村請制度や定免制をたてに藩の動きは鈍く、なかなか農民の願いは取り上げられなかった。

嘆願は、農民の希望を庄屋が嘆願書に取りまとめ、郡奉行、郡代を通じて提出されたが、窮乏^{きゅうぼう}がひどくなってくると、法を破って役所へ直訴するものが現われたり、一揆^{いっき}にまで及ぶこともあった。

高足村庄屋源吉の減租嘆願の話が「とよはしの歴史」に載っているので紹介したい。

明和7年(1770)高足村は、干ばつに見舞われ大凶作となった。18歳の庄屋源吉は村民の窮乏を救おうと藩に減租を嘆願した。藩主は役人に命じ検見をさせた。役人は畑ヶ田(現畑ヶ田町)の稲の出来具合を見るために野依橋まで来たが、源吉はたいへん困った。実は、畑ヶ田のみは豊作だったからである。そこで源吉は仮病を使って、橋の上で転がって苦しがつた。役人は仕方なく検見せずに帰っていった。また、翌年も大凶作となり近隣の庄屋とともに減租を嘆願した。なかなか認められず、他の庄屋は脱落したが、源吉はしつように嘆願を繰り返し、138石の減租に成功したが、強訴と役人を欺いた罪で捕われ、死罪を命じられた。村民の



庄屋源吉の碑

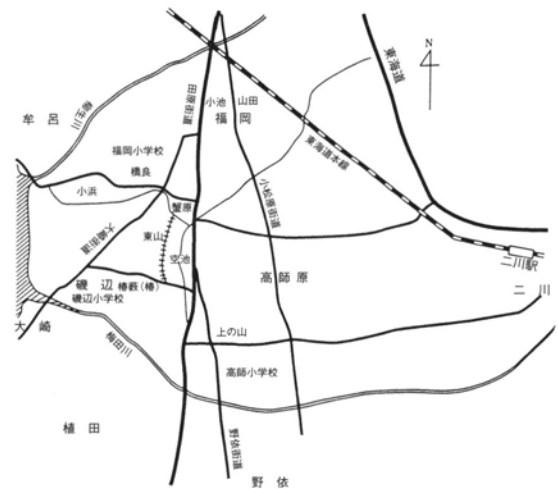
助命運動で死刑は免れたが、5年もの長い獄中生活のため25歳で病死した。庄屋源吉は奥谷寺(渥美線芦原駅近く)に葬られており、壮拳をたたえ、義人庄屋源吉の頌徳碑も円通寺(高師小学校隣)に建てられている。

(4) 軍隊のおかれた明治
高足村—高師村—豊橋市へ 明治の初期のころ、現在の栄校区の地域は、集落は点在するものの、多くは原野であった。

小松原街道沿いには小さな集落はあったがそれ以外の豊橋と田原を結ぶ

田原往還(当時の正式呼名で今の田原街道)と、牟呂・小浜・橋良から岩屋方面に通じる道路沿いには、ほとんど集落は無かった。明治時代の農村は貧しく、大部分の農家の次男、三男は町に出て、商店の小僧又は職人として修業した。現在の南栄町付近でいえば明治の中ごろ、このような人たちが、この地の田原街道沿いに店を開いた。

明治39年(1906)8月31日に、大崎村、高



高師村付近概念図(明治時代)

藩	郡	小区	戸長	明治初年	明治 11.12.28	明治 22.10.1			
吉田	源美郡	1	7	野吉三馬高	豊田村	東豊田村	明治 39.7.1 牟呂吉田村		
				田川相塚新				西豊田村	
				村田村田	青野村	吉田方村			
				青富久					
				竹編新					
				茅野新田	磯辺村	牟呂村			
				茅野新田					
				茅野新田	福岡村	高師村			
				茅野新田					
				2	9	山小池村持地高足分地良藤		福岡村	高師村
						田新田			
						村田村			
				3	10	高足原田尾		野依村	穂田村
						足新田			
						村田村			
3	15	大崎村	穂田村	穂田村					
		大崎村							

高師村を中心とした市町村の沿革

師村、福岡村、磯^{いそべ}辺村、野依村、植田村が合併して新しい高師村ができた。なお、それに先だって明治39年8月1日豊橋町は市制を施行して豊橋市（全国で62番目の市）となった。いずれも第15師団誘致への有効な措置となった。

昔は高師村は高足（葦）村といわれていた。それは梅田川の河原に葦がたくさん生えていたことからその名ができたのではないかと思われる。当時、この地域はたくさんの桑が植えられ、養蚕が盛んであった。

なお、昭和7年（1932）9月1日高師村は、豊橋市に合併された。このとき南栄という町名ができた。これは豊橋の南部にあっておおいに栄えることを願ってのことであるといわれている。

兵力増強と第18連隊 明治政府は西南戦争の処理をもって国内治安上の大きな区切りをつけ、明治15年（1882）に軍隊の性格、軍人の在り方などを示した軍人勅諭を發布した。

それと同時に兵力増強方針を発表した。それはこれまでの歩兵14個連隊をさらに10個連隊増強するものであり、同17年に歩兵第15連隊から第24連隊まで新設され、その内の歩兵第18連隊がこの豊橋に設置されることになった。そこで吉田城内に兵舎を建設し諸設備を整備して同18年には新設兵営に移転を開始し



第18連隊

た。翌19年には全ての兵舎が完成して連隊の移転も完了した。そのために豊橋及び周辺に大きな経済効果をもたらした。その後、第15師団が誘致され、昭和20年（1945）の敗戦までいろいろの変遷があったが、名実ともに軍都の名をほしいままにした。

日清戦争 明治27年8月に始まった日清戦争において連隊は平壤などの戦いで勇名をはせた。翌年講和条約が結ばれると多くの三河各郡長、町村長、そして沢山の人々に迎えられ9月に豊橋へがいせんした。

日露戦争 明治37年に日露戦争がぼっぱつした。ただちに連隊は満州（現在の中国東北部）へ出征した。多くの戦死傷者を出したが、大國ロシアに勝つことができた。

この二つの大きな戦争を経て、第18連隊に対する住民の信頼感はおおいに高まり、市民との一体感は経済生活の支柱ともなった。

豊橋^{ふりよ}俘虜收容所・高師原收容場 日露戦争は1年6か月で日本の勝利で終結した。ロシアからは多くの捕虜が出た。日本においてはその捕虜の收容が必要となり、全国に29の收容所を設置することとなった。豊橋にも11番目として明治37年関屋町の悟真寺^{ごしんじ}などに豊橋俘虜收容所が設置され、捕虜80人（将候40人、従卒40人）が收容された。翌年3月に豊橋俘虜收容所高師原收容場が現在の高師緑地公園内（老人センター辺り）に建設され、新たに



高師原收容場

に800人が収容された。捕虜への待遇は良く、また隣近所の人々も親しみを持って接した。将校等は市内の散歩も認められ、子供と一緒に遊んだりしたようだ。また外出が許されない高師原収容場の者たちは演劇の上演など楽しんだ。ロシア人捕虜の豊橋での生活はわずか1年にも満たなかった。

豊橋俘虜収容所高師原収容場として建てられた建物は、その後高師原演習廠舎として各地から高師原に来る兵士の宿泊施設として使用された。

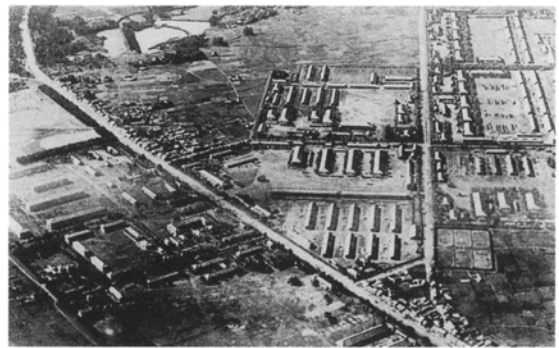
第15師団誘致 明治39年（1906）政府は日露戦争後の国際情勢に対処するために6個師団の増設を決定し、そのうちの1個師団を東海道筋に置くことにした。市制を施行した豊橋は、その師団の誘致に向け市議会議員、町総代等の協力を得て、師団設置期成同盟会を組織して運動を展開した。

同40年3月に陸軍省は第15師団を豊橋に設置することを決定した。誘致を申し出ていた沼津や浜松、岐阜ではなく豊橋に設置されることになったのは、高師原から天伯原にかけての広大な演習用地を持つことが適地として

認められたからである。

このころ蚕糸業の不景気により豊橋の経済は沈滞していた。そこへ師団設置により豊橋の人口は4万人に対して1万人余の消費者が急に増えたのである。食品や日用品をはじめとする商品の需要増加やサービス業の繁盛は、豊橋が不景気を抜け出す大きな要因となった。

第15師団発足 明治41年10月には、師団の諸施設の建設は順調に進み、ほぼ完成した。



誘致当初の15師団

そのころすでに習志野で編成されていた師団は、演習しながら豊橋に移駐してきた。そして、同年11月15日演習を終るにあたり中村師団長は「高師原練兵場」で閲兵分列式を行い、師団編成完結を告げた。

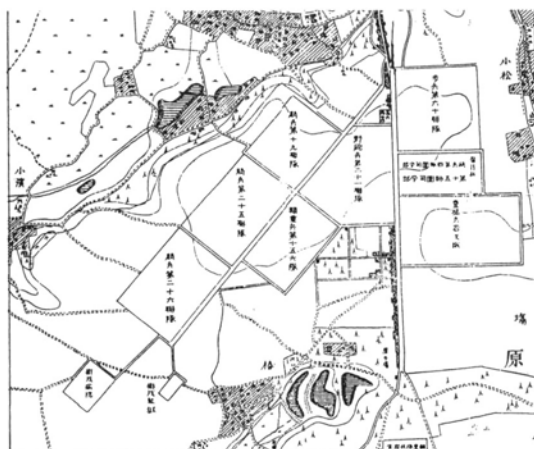
施設名	陸軍解体後（現在）
第15師団師団司令部（高師村）	愛知大学東亜同文書院大学記念センター
歩兵第十七旅団（豊橋）	
歩兵第十八聯隊（豊橋）	豊橋市役所・豊城中学等
歩兵第六十聯隊（高師村）	愛知大学
歩兵第二十九旅団（静岡）	
歩兵第三十四聯隊（静岡）	不詳
歩兵第六十七聯隊（浜松）	不詳
騎兵第十九聯隊（高師村）	福岡小学校
野砲兵第二十一聯隊（高師村）	愛知県立時習館高校等
工兵第十五大隊（豊橋）	愛知県立豊橋商業高校
輜重（しちょう）第十五大隊（高師村）	愛知県立豊橋工業高校等
豊橋衛戍（えいじゅ）病院（高師村）	国立豊橋病院 平成17年取壊し
豊橋憲兵分隊（高師村）	豊橋警察署南部交番
豊橋衛戍（えいじゅ）監獄（高師村）	住宅地（豊橋市一色町）
豊橋陸軍兵器廠（高師村）	南部中学校・栄小学校等
騎兵第四旅団（明治四十二年）	
騎兵第二十五聯隊（高師村）	ユタカ自動車等
歩兵第二十六聯隊（高師村）	豊橋南郵便局等

第15師団編成表（水口源彦氏提供資料より）

明治43年11月には皇太子殿下が視察され、大正4年(1915)1月には竹田宮恒久王が騎兵第19連隊長として着任された。同6年には、第7代目の15師団長として久瀬宮邦彦王も8月から翌年8月まで在任された。

大正7年10月には高師原陸軍特別大演習等、軍隊に関する行事が続いた。高師原、天伯原では、陸軍の演習がたびたび実施された。

軍隊と市民生活 師団の建設が始まると、建設のための資材は各地から運ばれ、大工・左官・石工等建設関係の人が集まり、いっぺんににぎわった。師団ができてからは、兵隊という消費者が一挙に数千人も増え、兵隊の家族の見送り、出迎えの人々が入り出りするようになり、新しい田原街道の整備とあいまって小池方面がにぎわってきた。道路も田原街道、大崎街道、小松原街道が整備され、師団司令部から柳生橋踏切までの道路が新しくできた。地元の人はこの道路を小池新道と呼んだ。



師団の配置図

この道路の両側には、商店が建ち並び、メインストリートとして高師村発展の象徴となった。また、豊橋市街には常に軍人の姿が見受けられ、入隊・除隊の風景も市民の生活にしだいに定着していった。そのため、旅館や繁華街は人であふれ、市の活性化におおいに貢献した。

今も残る師団のあと

・第15師団司令部(旧愛知大学本館) 現在は、愛知大学東亜同文書院大学記念センターとして使用している。平成10年(1998)に文化庁から「建造物文化財」に指定された。



師団司令部

・第15師団長官舎(愛知大学公官) 明治45年師団長官舎として現在の高師石塚町に建てられた。久瀬宮邦彦王も約1年間住まわれ、長女良子女王(後の昭和天皇后)も短期間滞在された。平成14年に豊橋市指定有形文化財に指定された。



師団長官舎

・偕行社(旧愛知大学短大本部) 明治42年に建てられ、将校向けの軍装用品などの販売、将校クラブ(親睦組織)などに使用されていた。

・将校集会所(愛知大学総合郷土研究所) 師団が設置されたときに、将校集会所として建てられた。師団司令部の「剛」に対して「柔」の雰囲気の建物である。この集会所は回廊と南側に庭園があり、緑に囲まれ、現在「哲学の森」と称され落ち着いた場である。

発展の契機と小池 軍隊とのかかわり合いは、高師村に師団が設置されて以来、昭和20年(1945)太平洋戦争が終わるまでの37年間にわたって続いた。その間多くの人々がこの地に集まり、そして去っていった。師団は高師村にも繁栄をもたらした。師団から豊橋駅及び豊橋の中心街へと軍隊向けの店が軒を連ねた。富本町から小池方面へ向かっての旧道沿いには、兵隊相手のおみやげ屋、周旋屋、料理屋、置屋、軍服屋、写真屋などができた。みやげ物として盃、徳利、湯のみ、手ぬぐいなどが売られた。また、郷里から面会に来る家族のための旅館も多くできた。また、旧道には花街(現有楽町)もでき、その隆盛ぶりは目を見張るものがあった。こうして師団が

設置されたことにより、兵営門前町が出来上がり、活気を帯びた町として発展していった。

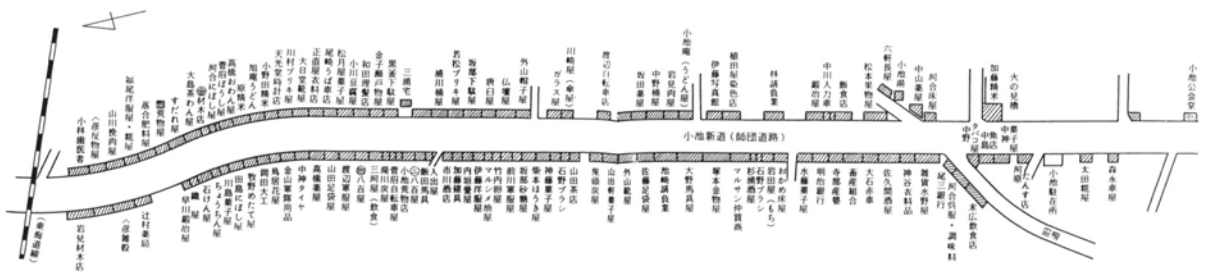
しかし、小池を前にしては、南栄を含む当地域の影はいかにも薄かった。唯一陸軍御用達として近藤パンが一軒できたのみで、軍関係物品を売る店は全く無かった。

また、農家にとっても師団から肥料が手に入った。下肥と馬糞は兵隊肥と呼ばれ大切な肥料源となった。なお、軍関係者に家を貸し、恩恵を受けた人もあった。

そして師団はこの地に現在も立派に通用する道路を残してくれた。それは小池坂上から高師駅付近の約2kmを20mに^{かくふく}拡幅した現在の国道259号線である。



大正14年(1925)ごろの富本町の家並み



大正14年ごろの小池町の家並み

(5) 戦争へ大正から昭和

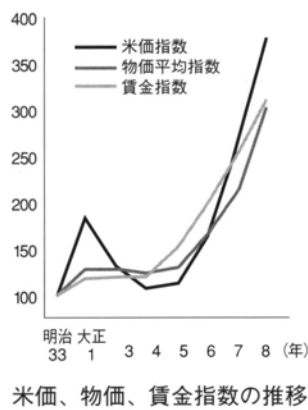
第一次世界大戦（好況から不況へ） 大正3年（1914）にヨーロッパで第一次世界大戦が起きた。日米両国は連合国への軍需物資の輸出に加えヨーロッパ諸国の輸出市場を独占し、日本の貿易は輸入超過から一転、輸出が急伸し大戦景気を迎えた。このため国内消費されるべき物資も輸出に回され、国内の物不足が生じて物価が高騰し庶民の生活を圧迫した。例えば、米価は7年には前年比で約2倍の状況となった。富山県で同年7月に発生した米騒動は全国に広がり、豊橋でも8月に米騒動が発生し、わずか2日間で逮捕者53人が出た。

大正7年に第一次世界大戦は連合国の勝利で終わった。ヨーロッパの経済復興につれて、日本の獲得していた市場は奪回されはじめ、日本経済は好況から不況となり、9年の株式

相場の暴落をきっかけに恐慌におちいった。綿糸、生糸の相場は半値以下となり、^{さんと}蚕都豊橋や当高師村も大きな影響を受けた。また12年には関東大震災が起これ日本経済はさらに大きな打撃を受けた。

渥美電鉄 大正11年に渥美電鉄(株)が創立され、豊橋から福江までを結ぶ壮大な計画のもと沿線の人々の期待を担って発足した。

同12年に高師・田原間を着工、翌年高師・豊島間及び、師団口（現愛知大学前付近）・高師間を延長し、14年には、新豊橋・田原間が開通した（なお、当時からこの路線は渥美線と呼ばれていた）。しかし、当時は不況の真ただ中であり、また第15師団の廃止の影響も受けて、たいへん暗いスタートとなった。



その後、田原・黒川原間も開通したが太平洋戦争のために、そのレールは撤去され、軍需製品へと転用された。

第15師団廃止 第一次大戦後の世界の潮流は軍備縮少に向かった。

この地域の期待を担って設置された第15師団もこの影響を受け、大正14年に廃止されることとなった。師団の解団に伴って多くの兵士（約3,000人）がいなくなったことは、この地域の経済に手痛い打撃を与えた。しかし存続部隊があり、残された施設がその後また軍の施設に利用されて、いったんはさびれた旧兵営付近の商店も活気を取り戻した。（新潮報大正14.3.28）昭和2年（1927）に解団された歩兵第60連隊（現愛知大学）、野砲第21連隊（現時習館高校）跡に豊橋陸軍教導学校が設けられ、後にそこに第一予備士官学校が置かれた。その訓練は激烈をきわめ、耐えかねて渥美線に飛び込み自殺をした学生もあったとのことである。

なお、予備士官学校の氏神であった豊秋津^{とよあきつ}神社は太平洋戦争の終戦とともに廃止されたが、これを惜しんだ人たちが、社標と灯籠を^{すさのおじんじや}進雄神社（南栄）の境内の一角に移した。

存続された師団^{えいじめ}衛戍病院は日中戦争が始まると豊橋陸軍病院（旧国立豊橋病院）となったが、増加する戦傷病者を収容しきれず南栄



豊橋陸軍病院高師原臨時病院

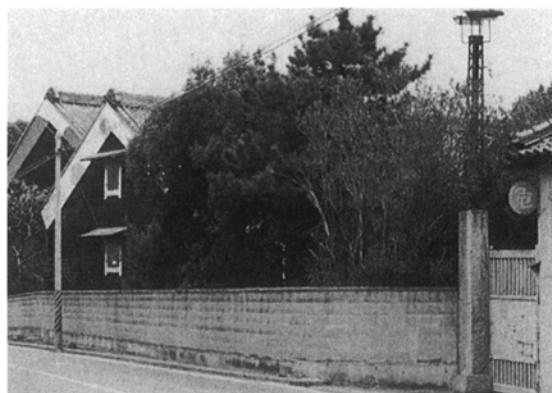
いよよく 豊橋師団廃止

師団廃止の
新聞記事見出し

地区に高師原分院を設けるほどであった。

軍国化（施設の拡大） 昭和初期は大正末期の低迷をそのまま引継いだ。昭和4年(1929)ニューヨークに端を発した世界恐慌の影響も受けて日本全土が恐慌状態となった。各農産物価は下落し、特に生糸は対米輸出激減の影響を受けて繭の価格は暴落し、この地では養蚕を見かぎる農家が相次いだ。一方東北地方では冷害も加わり生活は極度に困窮し、欠食児童や娘の身売りが続出する状態であった。

日本経済は昭和5～6年を底に立ち直りをみせはじめた。それは6年の金輸出再禁止等による円為替相場場の下落、すなわち円安による輸出増進、さらには軍需等で8年には大恐慌以前の水準を超えた。生糸の米国向け輸出も伸展し9年にはピークに達した。当時、豊橋は主要農産物である繭を生糸に紡ぐ製糸業が盛んで、「糸の街」あるいは「蚕都」ともいわれていた。なお、当高師村は昭和7年に豊橋市と合併した。



元引鈴木製糸

校区内の、山田町（小松原街道沿い）にあった引鈴木製糸は最盛期には350人ぐらい働いていた。戦後、豊橋真田工業となったが巨大な倉庫と赤煉瓦塀が昔の面影をとどめていた。現在は取り壊され、スーパーやホームセンターなどになっている。

南栄近辺も活況をおびてきた。直接の原因は、第15師団の連隊跡等に、軍国化の伸展に

伴って軍事施設が設置拡大されたことにより、多くの地方出身者も採用され、その大多数はこの近辺に居住し生活したからである。

日本は昭和6年の満州事変を契機に、軍国化の道を歩み始めた。11年の2・26事件を機に軍の政治介入を許した。12年7月廬溝橋事件が北京郊外で起きた。事件後停戦協定が結ばれたが、軍部の圧力に押された政府は不拡大方針を変更して兵力増強を決定した。これが日中戦争（支那事変）の始まりであり、太平洋戦争へとつながった。それまで空家となっていた輻重第15連隊跡（現豊橋工業高校及び附近一帯）及び騎兵第25連隊跡（現ユタカ自動車学校及びマックスパリュ一帯）が陸軍名古屋兵器補給廠豊橋分隊となったのがこのころである。また陸軍兵器廠（現南部中学校から豊橋技術科学大学官舎にかけての地区）の火薬庫は大拡張された。現在の県道平井牟呂大岩線に沿って旧開拓農協辺りから市営栄生住宅3号棟中央部まで広がっていた。兵器廠は弾薬の管理を主に、兵器補給廠は馬装品・銃火器・車両・舟艇等全ての兵器を集積搬出することを業務としていた。その施設は旧15師団の二つの兵営にまたがる広大なものであった。一方高師原での演習も激しくなった。夜間演習もしばしば行われ、機関銃の音が終夜鳴り響くことも多くなった。

戦争突入 日中戦争が拡大の一途をたどる昭和13年5月、国家総動員法が施行された。この目的は戦争遂行のため国民を徴用したり、物資を徴発する大きな権限を国家に与えることであった。16年の改正で、政府の権限は一段と強化された。こうした政府の権限強化は、しだいに国民生活を圧迫した。すでにガソリン、鉄鋼等の戦略物資は13年から統制品目ではなかった。しかし戦争が長びくにつれて物資不足は目立ち、なかでも食糧事情の悪化

は国民生活に最も大きな影響を与えるもので、政府は対策を立てる必要に迫られた。

昭和15年、政府は米穀管理規則を定め、米を国民に配給する制度を整えた。16年、豊橋等の地方都市へも実施区域が広がった。

昭和14年にヨーロッパで第二次世界大戦が始まった。翌年には「日米通商条約」の破棄が発効し、16年9月には東条内閣が成立した。東条英機首相は軍人であり国民は米・英との開戦が不可避と感じた。同年12月8日、日本は米・英・オランダの3国に対してついに宣戦布告をし、太平洋戦争が始まった。

戦中の苦しい生活 日本は開戦当初、ハワイ、香港などを急襲し大勝利を納めた。ラジオ放送は戦果発表のテーマ音楽に「軍艦マーチ」を流し、相次ぐ勝利にそれが途絶えることはなく、国民は歓喜した。

しかし昭和17年6月、日本海軍はミッドウェー島において敗北を喫した。この敗北を転機に米軍は本格的な反攻に転じてきた。以後戦局は日々悪化していった。18年アッツ島守備隊の全滅、ガダルカナル島の撤退等やB-29爆撃機による本土空襲の開始に、国民は戦局が抜き差しならぬ段階に達したことを感じた。19年には特攻作戦が開始されたが、戦局のばんかいはならず、その後の硫黄島戦、沖繩戦等の敗退は日本の敗北を決定的なものとした。

「配給・供出」

国民生活では、昭和16年に始った配給制度によれば、11歳から60歳までの男女に1日当たり330g（2合3勺）の米を配給する

品名	配給量
米	1人1日2合3勺 (330g)
味噌	1人1か月200匁 (750g)
醤油	1人1か月4合 (720ml)
生菓子	1人1か月20銭
小児用菓子	1人1か月30銭
豆腐・油揚げ	配給の都度連絡
砂糖	1人1か月0.5斤 (300g)
マッチ	1世帯1か月小箱10箱
木炭	1世帯1年 9俵 (3~5人世帯で20~29俵の場合)

配給物資例

というもので、栄養補給の大部分を米に頼っていた当時の食生活の上から最低の線であった。開戦後物資の不足はいよいよ激しくなり、昭和17年に食糧管理法が施行された。これにより米麦のほか雑穀、さつまいもなど主要食料品の大部分が国家管理のもとに置かれた。さらにこの年、味噌、醤油の配給制に続き、1人1年間100点の切符の範囲に購



衣料切符

入を制限した衣料の総合切符制が実施された。これではとても足りず、破れた衣類や靴下のつくろいが主婦の大事な仕事であった。配給品目はつぎつぎに増え、食用油、菓子類、木炭等が常時配給品になった。さらに豆腐、にぼし、鶏卵、たばこ、ちり紙、石鹼に至るまで配給は拡大された。米の不足はますます深刻になり、19年以降は1か月に10日分ほどの量に減配され、不足分は芋類、豆かすなどが代用食として配給され、市民は芋や野菜、その他食糧となるあらゆる物を米と一緒に炊き込んだ雑炊、すいとんを常食として空腹をしのいだ。不足分を周辺の農家へ買い出しに出かけ、配給価格の数倍もする闇価格で買い求めた。敗色濃い20年には、ついに配給量は301g（2合1勺）に減配された。母親たちは子供に食べさせるため、たんすから自分の衣類を取り出し、わずかな米と物々交換した。

海外輸送路を断られた日本政府は、兵器生産の金属類を確保するため、国民の使っている鉄、銅等の金属を供出させた。初めのところは各家庭1品であったが、昭和16年の金属回収令は強制力を持ち、17年には豊橋全校区で一斉回収が行われ、門柱、手すり、橋の欄干、火鉢などがつぎつぎと供出された。翌年には市内の各寺院の釣鐘、郵便ポスト、下水の蓋に至るまで姿を消した。市民の信仰を集めて

いた岩屋観音像までも兵器に変わった。

「勤労働員」 昭和18年（1943）以降の兵力増強は、農業・軍需産業への労働力不足をもたらした。同年7月政府は国民徴用令の強化改定をし、対象を12歳から60歳までの男子に広げた。

同年9月、政府は未婚の女性を勤労挺身隊として軍需工場へ動員する計画を立て、19年1月豊橋でも15歳以上25歳未満の女性で女子挺身隊が結成され、豊川海軍工廠^{しょう}へ向かった。続いて同年3月、市内の各女学校の進学しない卒業生のほぼ全員が女子挺身隊に参加した。

さらに同年9月動員は拡大され、中等学校低学年と国民学校高等科にも及びその多くは豊川海軍工廠に配属された。

「学校教育」 昭和16年4月、戦時体制に即応する教育改革の一環として国民学校が発足した。それは天皇に対する絶対の忠誠心を持った国民の育成にあった。従来の尋常小学校・尋常高等小学校はそれぞれ国民学校初等科・国民学校高等科と改称され、教科の統合、教科書の改訂も行われた。なかでも皇室中心の歴史教育、武道と体操を合わせた体錬科^{たいれんか}は特に重視される国民学校教育となった。

「豊橋の教育百年の歩み」の中で、国民学校の一教諭はこう振り返っている。

強い国民、強い子供をつくるという思いから連帯責任を問い、厳しい体罰を加えたこともあった。また粉雪の降る日にクラス全員をパンツ一枚にして体から湯気が出るまで駆足をさせた。集合が遅いとき、一時間中『別れ・集まれ』を繰り返させた。（要約）

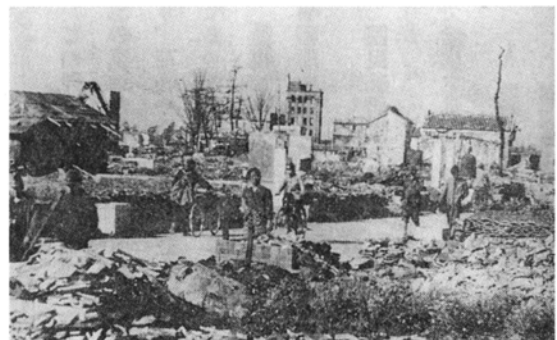
同教諭が皇国民錬成^{こうこくみんれんせい}の一端を担ったことに対しての、苦渋をにじませたの回想である。

昭和18年1月には中等学校令が公布された。これは公私立の中学校・高等女学校・実業学

校の教育を、先の国民学校令の延長線上におく教育改革であった。心身の鍛錬や勤労を重んずる「修練」が新設されたのが特徴的である。こうした制度改革とともに生徒たちは、しだいに総力戦としての労働力の供給源となり、食糧増産の切り札とされたのである。それでもまだここまでは心身錬成の場として位置づけ、かろうじて学校教育の延長と考えられる範囲であった。しかし、昭和19年3月、県は愛知県学徒動員実施要綱を発表し県内の各大学・高等専門学校・中学校に通達した。この動員はこれまでと違って、学校の授業は全く行わず、一般の工員に混じり年間を通して兵器生産に携わる勤労作業通年動員であった。

「空襲」 昭和19年11月サイパン島基地を発進した米軍爆撃機B-29が東京へ初めて姿をみせた。以来空襲はしだいに本格化し、本土への空襲は激しさを増した。11月23日に、豊橋でも空襲警報が発令されたが豊橋上空へは飛来しなかった。しかし空襲が間近に迫っている危機感を市民に与えた。20年に入り大都市の空襲が激化すると、市民の危機感はいっそうつゆのり、豊橋でも警戒・空襲警報はやがて日常茶飯事となった。6月18日夜中、浜松市が空襲を受け燃え上がり、今度はいよいよ豊橋の番だと市民は予感した。

翌19日午後9時半、豊橋で警戒警報につづいて空襲警報が発令されたが、およそ30分で解除された。ほっと一息ついた、午後11時40



戦災直後の豊橋市街

分ごろ（20日午前0時40分ごろともいわれる）、突然サイレンが鳴った。その時すでに柳生川運河方面で火の手が上がっていた。

それから2時間余の波状攻撃で、136機のB-29は逃げまどう市民の頭上に焼夷弾の雨を降らせた。そんな市民に超低空で飛ぶB-29の編隊は機銃掃射を加えた。

夜明けまでに市街地はほとんど焦土と化した。全焼、全壊家屋は全戸数の70%、死者624名、重軽傷者346名と被災人口は全市民の50%に及んだ。

山田町の谷野はなさんは、「福岡 むかしと今」の中で次のように話している。

義弟が『逃げんと危ない。おれは残って火を消す』と大声で叫びました。妹は2歳の次女を背負い、乳母車に7歳の長男を連れて逃げました。山田の踏切近くまで来ると油が雨のように降って来ました。立ち止まった瞬間、辺り一面が火の海となり、2m位前を走っていた妹たちの姿が見当たりません。心配でしたが、火と煙にまかれられないように夢中で逃げました。山田神社の裏で妹たちの安否を気遣いながら夜を明かしました。夜が白むころ、妹が大怪我をしていると知りました。急いで帰ると家は丸焼けで妹たちは町内会長の家にいました。おいは焼夷弾が直撃、即死。妹とめいは大火傷をしていました。妹とめいは痛みながら1週間後に国立病院で息を引き取りました。（要約）

また、豊橋空襲の後、終戦が間近と迫っていた昭和20年8月7日に豊川海軍工廠がB-29の爆撃を受けた。ここには勤労働員された生徒たちが多数働いていた。爆撃により2,500人余が爆死し、その数倍を越す重軽傷者を出した。そのうち、豊橋市内の中等学校11校の生徒・先生303名が犠牲となった。こ

の中には多数の女子学生と当地域在住の生徒も含まれていた。

時習館高校の構内に「早咲きの 花が散った 美しく」と刻まれた碑があり、その裏には犠牲となった前豊橋中学校の先生2名、生徒37名の名前が刻まれている。

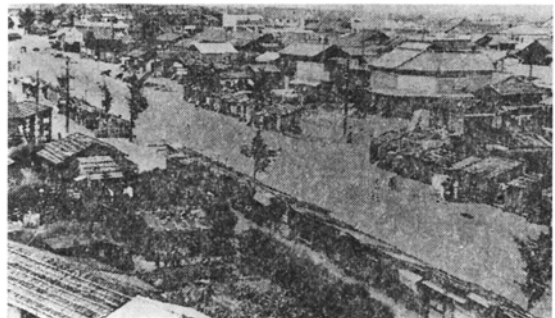
米・英・中・ソ連の4国は日本の無条件降伏を主旨とする「ポツダム宣言」を昭和20年7月に発表した。米軍は同年8月6日に広島、8月9日に長崎へ原子爆弾を投下、また8月8日にはソ連が「日ソ中立条約」を無視し、日本に宣戦布告し、満州他へ侵攻した。

こういった状況下で、ついに昭和20年8月15日、日本は無条件降伏し、終戦を迎えた。

(6) 戦後の復興

戦後の苦しい生活 昭和20年8月15日の終戦を告げる玉音放送で戦後は始まった。空襲の焼け跡の中で人々は敗戦の衝撃に打ちひしがれ、飢えと失望からの出発であった。豊橋市の食糧配給は、麦、雑穀、さつまいもなどが主なものであり、しかも配給量は1,400cal台まで低下し、深刻な食糧不足がもたらす飢餓からの脱出が急務であった。また海外引揚者や復員軍人による急激な人口増加と、需要と供給の極度なアンバランスで、市民生活を脅かす悪性インフレーションが発生し、その結果生み出されたのが闇市である。

豊橋では昭和20年10月ごろから、駅前通りにバラックやよしず張りの仮店舗、露天市



駅前に出現した闇市

場などを中心とした闇市が出現した。いもあめ、みかん、たばこ、包丁など生活物資が売買された。ここでの闇価格は、昭和17年(1942)に制定された統制価格と比べると異常な高騰ぶりであった。とくに、砂糖は500倍、米は120倍、石鹼は100倍の値段で取り引きされた。それでも人々は生きぬくために駅前闇市へと足を向けた。闇市を営む露天商の資格は何の制限もなく、警察に届ければ誰でもできた。そのため、市場の混乱は著しく無法地帯と化していた。

そこで全国の都道府県は露天商取り締まりの県条例を採択し、闇市の取り締まりや組織化を推進した。豊橋警察署も組織化を指導して、同21年8月13日に「豊橋露天商組合」を成立させた。そして、混乱した秩序を回復することと駅前の美観を整えるために、闇市を駅前から神明町に移すことを決めた。移転は順調に進み、12月16日には完了した。

名前は「青空市場」「明朗市場」と呼び健全なイメージを市民に与えたが、その実態は必ずしも名前のおりではなく、闇価格が横行していた。その後、龍拈寺境内と牟呂用水上の大豊百貨店、それに接続する個人店舗に移り住んだ。100世帯を超える移転は、無事に昭和25年に完了し、混乱の時代の市民生活を支えた闇市は幕を閉じたのである。

また、さつまいもの収穫期には、豊橋周辺



列車に殺到する買い出し部隊

の農家に多数の買い出し客が訪れ、豊橋駅は関西方面からの買い出し客も加え大混雑し、1日平均3,500人に及ぶ乗降客でごった返した。さつまいもの季節が終わると、麦、じゃがいもと、買い出し客はあとを絶つことがなかった。また、渥美半島にも、空き缶を抱えて魚を求める「カンカラ部隊」が殺到した。高師原・天伯原の開拓の苦勞 県下最大の開拓地として脚光を浴びたのが広大な旧軍用地であった高師原、天伯原である。食糧増産と失業対策の二つの目的から、国の緊急開拓事業として県と協力しながら進められた。第一就農者700余人は、大清水演習廠舎5棟に分宿して約1か月の共同生活と開拓技能訓練を受けた。そして、昭和20年11月6日鋤入式が行われ、開拓が着手された。

この開拓農民は、戦災者、海外引揚者、復員者、失業者などを対象に、自己資金3,000円と家族労働があることを条件に一般応募という形で入植した人々であった。12月5日、10戸単位で耕作区を決定し、各戸12haの土地仮配分を受けて開拓に従事した。翌年の5月には、この地域の入植者を対象に開拓指導所が浜道町に開設された。9月には開拓実験農場も併設されて、開拓者に対する指導体制も整備された。

「鬼の天伯、地獄の高師、流す涙が梅田川」と唄われた演習地も開拓の鋤が入り、農地へと変容していった。しかしこの軍用地はもともと小松や灌木しか生えない荒地であり、農地には適していなかった。土壌は強い酸性で有機質に欠けており、地形は丘陵地帯で水の確保が難しく干ばつの起こりやすい場所であった。さらに、開拓の大きな障害となったのは、開墾の際の抜根作業である。松、つつじ、ささなどの灌木の抜根は、人力では限界があった。そこで威力を発揮したのが旧軍隊の小型戦車や野砲牽引車に碎土機を取りつけ

た20台ほどの急造ブルドーザーであった。1台で1日50aの開墾^{かいこん}ができ、人力の150倍から300倍の能率をあげることができた。しかし、ブルドーザーの入れない複雑な場所では、人力に頼らなければならず、その労力はたいへんなものであった。

次に、開拓農民たちが取り組まなければならなかったことが土壌の改良である。やせている畑地を肥やすためには、野草、海藻、馬糞^{ばふん}、下肥^{しもごえ}、石灰などを大量投入する必要があった。家畜を飼育し、その厩肥^{きゅうひ}を利用するのが効果的だと分かっているが、家畜は高価で容易に手に入らなかった。入植者たちは10km以上離れた市街地まで荷車を引いていき、人糞尿^{じんぶんによう}をはじめ路上の馬糞まで集めて畑地へ運ぶ苦労を繰り返した。

開拓農民のもう一つの闘いは飢えであった。やせた土地では芋さえ大きくならず、食糧営団の配給を受けて飢えをしのぐありさまであった。入植1年間は、1日当たり16歳以上の男子には287g（2合）、女子には144g（1合）の米の配給が特別に考慮されたが、それも遅れがちであった。入植者たちは、じゃがいも、さつまいも、カボチャを主食として、米の配給があった時だけ、米にこれらを入れた雑炊などを食事としてとった。なかには、生活難のために配給米を食べずに売って生計を維持する入植者もいた。こうした極限状態の食糧事情のもとで、重さ4kgもある重い開墾鋤をふるって開拓が進められたのである。

住居事情も劣悪であった。古材を寄せ集めたバラック生活でも自分の家を持つた者は恵まれた方で、多くの入植者は軍用廠舎や神社の社務所、農家の納屋などで共同生活をして開墾地へと通った。昭和21年（1946）1月、国は開拓地用の建築用材として14,000戸分の木材を用意し、建築助成金も1戸当たり3,000円と増額した。1,038戸分の割り当てを

受けた県は助成金を2,000円に減額し、その分を回して1,555戸に割り当て戸数を増やす特別措置をとった。豊橋と刈



豊橋南部地区の開拓団分布図

谷に生産工場を指定して開拓地用セット住宅を量産し、開拓農家へ配給した。家はできても電気はなく、開拓農家はランプやバッテリーに結んだ豆電球の暗い生活を続けなければならなかった。

生活難と過酷な重労働から、昭和20年度の豊橋地区の離農戸数は488戸にのぼり、離農率は46%と驚異的な数字を示した。これは入植直後の開拓の困難さを表すものである。

新しい教育と施設 豊橋市は戦後消失した学校施設の確保に全力を注ぎ、旧軍施設を借用した。教室はできても、教育の目標が混沌とした状態であった。昭和20年9月に文部省から、平和国家の建設という通達が出されたが、教師たちの混迷は深まるばかりであった。

G H Qは、軍国主義教育の撤廃と民主教育の推進のために、昭和20年10月から12月にかけて四つの教育指令を出した。第1の指令は、軍事教育の色彩の強い教科書の改訂である。第2の指令は、教育者としての適格審査である。かつて軍国主義者あるいは超国家主義者として活動した教育者の追放を要求した。また復員者についても審査が厳重で、職業軍人ではなかったという証明ができないうちは教壇に立つことが許されなかった。第3の指令は、天皇を神とする旧来の思想を打破し国家神道を教育の場から追放することである。そこで、市内の各学校では御真影^{ごしんえい}を奉還^{ほうかん}し、奉安殿^{ほうあんてん}の撤去作業が行われた。第4の指令は、封建的な道徳思想を教えた修身、世界に君臨

する国家として意識づけた歴史、地理の教育を禁止した。これによって、地理、歴史の授業はもちろんのこと、修身の授業も教育現場から姿を消した。

このように戦前の教育が否定される中で、ジョージ・D・ストッター博士を団長とする教育使節団が来日した。使節団は1か月にわたって全国の学校の教育事情と教育制度を調査し、報告書をまとめてGHQに提出した。この教育使節団の報告書は、日本の新しい民主教育の大きな指針となり、教育基本法や学校教育法の制定にその趣旨が生かされた。

この中で特筆されるのは、義務教育年限が延びて、6・3制教育が誕生したことである。つまり、従来の高等科が廃止され、新制中学校が設けられた。それまで中学校や女学校に入学できたのは、一部の子供に限られていた。この学制の改革は、教育の機会均等を小学校から中学校にまで広げた画期的なものであった。

もう一つの大きな改革は、男女共学の実施である。これは、それまでの男女の差別をなくすことにつながり、教育の男女平等を実現する基礎となった。6・3制の発足で、地方自治体は頭痛の種を抱えることになった。中学校は独立校舎にするという閣議決定がありながら、国では予算措置が全く行われていなかった。

豊橋市では焼けた小学校を再建することもできない状態であり、中学校の建設など手の

中学校名	開校場所	23年度変更校名
中部第一中学校	国民学校高等科	中部中学校
中部第二中学校	女子商業借用	豊城中学校
東部中学校	東田教場他	青陵中学校
北部第一中学校	下地小学校借用	北部中学校
北部第二中学校	牛川教場他	青陵中学校
西部第一中学校	羽根井小学校借用	羽田中学校
西部第二中学校	牟呂小北校舎他	牟呂中学校
西部第三中学校	吉田方小学校他	吉田方中学校
南部第一中学校	福岡教場他	南部中学校
南部第二中学校	植田教場他	南部中学校

豊橋市内新制中学校一覧表

出しようがなかった。しかし、新制中学校は昭和22年（1947）4月1日に発足させなければならない。そこで、豊橋市は臨時の措置として、小学校の校舎の一部や工場、兵舎、青年学校などを借りて生徒を収容した。

昭和22年4月に創立された豊橋市内の新制中学校は、10校であり、同23年4月に愛知県の県立新制高等学校は55校で出発した。この新制高等学校は、男女共学、総合制、小学区制の三つを旗印に発足したが、必ずしも順調

旧校名	新校名	位置
愛知県豊橋中学校	愛知県豊橋高等学校	富本町
愛知県豊橋第二中学校	愛知県青陵高等学校	牛川町
豊橋市立高等女学校	豊橋市立高等学校	向山町
豊橋市立商業学校	豊橋市立商業高等学校	向山町
豊橋市立女子商業学校	豊橋市立実業高等学校	旭町
豊橋市立工業学校	豊橋市立工業高等学校	草間町
豊橋市立農業学校	豊橋市立農業高等学校	町畑町
豊橋藤花女子高等女学校	藤ノ花女子高等学校	老松町
豊橋桜ヶ丘高等女学校	桜ヶ丘高等学校	中八町
愛知高等実修女学校	愛知実修女子高等学校	鍵田町
豊橋松操高等女学校	松操女子高等学校	山田町

豊橋市内新制高校一覧表

ではなかった。特に、男女共学については根強い抵抗があった。新制高等学校の発足にあたり、多くの学校は旧制中学校の名前を踏襲して新制高等学校名としたが、ナンバースクール廃止の意見が強く、校名改称に苦勞した学校もあった。なお、市内には県立高等学校が2校、市立高等学校が5校、私立高等学校が4校設立された。

水不足と豊川用水の起工 戦後の食糧難を打開するために高師原、天伯原の開拓が進められたが、水不足により農業生産は伸び悩んでいた。開拓地に限らず、豊橋南部地域から渥美半島にかけては、しばしば干ばつの被害に悩まされていた。

こうした状況を解決するため、県は戦前に計画されていた農林省の^{かいこん}大規模開墾計画（豊川導水計画）の早期実現の検討を始め、国に実施の要請を行った。地元でも、豊橋市が隣接の市町村や県地方事務所と一体となって、

豊川農業水利事業の促進運動を展開した。昭和22年1月、東三地方河川開発期成同盟会が結成され、会長に豊橋市長横田忍が就任した。同24年9月に豊川農業水利事業は国営事業として認可され、新都市に豊川農業水利事業所が開設された。当初計画の事業費は18億円であり、受益面積は10,468haであった。同25年12月に広川農林大臣を迎え、豊橋市公会堂で盛大に豊川用水の起工式が行われた。

豊川用水は農業用水に限定されていたが、昭和26年の天竜東三河総合開発特定地域の指定により、その一環に組み入れて総合水利事業として性格を変えることとなった。かつての農業用水的性格から上水道や工業用水を含む産業経済全般の総合開発へと転換したのである。そのため、用水量の増加が必要となり規模も拡大された。さらに、昭和33年に佐久間ダムからの分水協定も成立し、年間5,000万トンの水が佐久間ダムから豊川用水へ送られることになった。この年の12月に貯水池の役割を果たす宇連ダムが完成した。

その3年後に、宇連川から豊川用水路に取水する大野頭首工が完成した。この水利事業は愛知用水を手がけた愛知用水公団に引き継がれた。その後、東西幹線水路などの工事が急ピッチで進み、着工以来19年目の昭和43年に完成した。総工費488億円を費やした豊川用水は、水不足に悩んできた人々に新しい農業への挑戦と勇気を与えた。

これによって当地方は農業生産高で日本で有数になった。また、この豊川用水



豊川用水の受益地域

は、60万人を越える東三河の人々の生活用水、工業用水として、重要なはたらきをしている。

2 すすむ住宅化と商業化

(1) 軍隊の街から学園の街に

各種学校の設置と通学や下宿 この地には、明治41年(1908)に第15師団が設置され、当地域はその隣人として昭和20年の敗戦に至るまで約40年間にわたって陸軍と盛衰を共にした。その陸軍は敗戦により壊滅したが、その建物等の施設がほとんど無傷で残った。豊橋市街の大部分は空襲により焼失した。その中には多数の学校や官公庁が含まれていた。これらの落ち着き先として旧軍隊の建物が脚光を浴びたのは、当然の成り行きであった。

豊橋市は、昭和20年11月に「豊橋市払下貸下軍用土地建物利用案」を発表した。それには、旧軍隊施設ごとに利用案が列記されていた。どの施設にも住宅をはじめとして官公庁、学校等の利用計画が目白押しであった。その中で、当地域及び周辺の施設に予定された学校は、次のとおりであった。

- ・豊橋陸軍第1予備士官学校砲兵隊
：豊橋中学校
- ・豊橋陸軍第1予備士官学校歩兵隊
：名古屋工業専門学校
- ・名古屋陸軍兵器補給廠豊橋分廠^{へいきほきゅうしょうとよはしぶんしょう}
：豊橋市立工業学校
- ・名古屋陸軍兵器補給廠豊橋分廠東倉庫
：豊橋市立商業学校
- ・名古屋師団管区兵器部豊橋出張所
(通称兵器廠)：豊橋市立農業学校(新設)

この中で豊橋中学校(現時習館高校)と豊橋市立工業学校(現豊橋工業高校)は原案どおりここに決定したが、名古屋工業専門学校(現名古屋工業大学)と豊橋市立商業学校(現豊橋商業高校一向山町の陸軍工兵隊跡へ)の

ここへの移転は中止となり、後に前者には愛知大学が入ったが、豊橋商業学校の予定地は、どこであったか不明である。兵器廠^{しょう}には予定どおり豊橋市立農業学校が置かれたが、それは間もなく時習館高校農業科となり、その敷地の一部が豊橋市立南部中学校、さらにそれが分割され、豊橋市立栄小学校になった。時習館高校農業科はやがて廃止された。これらの学園はすべて当地域及び道路を境として当地域に接するもので、陸軍があった時代と地理的な関係は全く変らない。

当地域は「軍隊の街」といわれていたが、各種学校開設後、豊橋鉄道南栄駅を中心に、朝夕は豊橋中学校、豊橋工業学校の生徒の通学でにぎわうようになった。また愛知大学の開校とともに、この地に多数の学生が下宿したので、南栄を中心としたこの一帯は、「学園の街」に変貌した。また、兵器補給廠豊橋分廠(騎兵第25連隊跡)にはユタカ自動車^株等が入ったが、その西側の馬場があった所に県立豊橋盲学校が、また豊橋市立工業学校に接して県立豊橋ろう学校が置かれた。

戦後の社会改革の中で、重要にして国民に一番身近なものの一つに教育改革がある。昭和22年(1947)に国家主義的な教育勅語^{きょういくちよくご}にかわって、民主主義的な教育理念を盛り込んだ教育基本法を制定し、6・3制(小学校6年:義務教育、中学校3年:義務教育)、高校3年、大学4年などの新学制を定めた。この新学制は従来の小学校6年の義務教育や中学校5年、高等専門学校3年、大学3年などと比べると、小学校6年の義務教育が同じのみで、他は大きく変更されることとなった。なかでも、新制度の中学校は、旧来の制度から全くはみだすものであった。

この地域には、福岡、高師、磯辺^{いそべ}の小学校を中学校区とする南部第一中学校が設置された。現在の栄校区の大部分は、当時は福岡校

区に包含されていた。したがって、当地域の生徒もこの中学校の生徒となったが、校舎も無いことから福岡小学校でそのまま新制中学1年生としてとどまることとなった。

・豊橋市立南部中学校

昭和23年4月、植田、大崎、野依^{のより}小学校区の生徒を収容した南部第二中学校と南部第一中学校を統合して豊橋市立南部中学校と呼称し、豊橋市立農業学校の敷地内の兵器庫を改装した新校舎で授業を開始し、新制中学が設置されて1年後、本格的な学校としての体裁を整えることができた。

しかし、生徒1,535名を収容するには十分でなく、すし詰め教室の状態であった。しかも、机が不足し生徒は家からそうめん箱(木



豊橋市立南部中学校の校舎

箱)などを持参してその代用とした。また教室の窓は小さいため、光が中まで届かず一日中薄暗くて、雨や曇りの日は授業にも差し支えるほどであった。このような悪い環境の中で先生、生徒ともたいへんな苦勞をした。

・愛知県立時習館高校

吉田藩の藩校時習館の流れをくむ現在の時習館高校は、県立第四中学校から県立豊橋中学校の校名のもとに中柴町^{なかしば}にあったが、戦災で焼け現在地に移転した。校舎は旧軍隊の建物を使用したものであり、教育環境は南部中学校と同様で非常に厳しかった。

・愛知大学

敗戦によって日本の全ての植民地は失われ

た。そのためにそこにあった大学・高等専門学校^{高等専門学校}の存続は不可能となり学生及び教師たちは去就に迷った。中華民国にあった東亜同文書院もその例に漏れず、最後の学長であった本間喜一教授は有志と図り、新大学を設立してこれを受け入れようとした。その場として、多くの兵舎が残る豊橋に注目し、熱心に設立運動を始めた。当時の豊橋市の人口は、約15万人であったが、大学も高等専門学校も無かった。これは全国的にも珍しく、市民の心ある人はその必要性を感じていた。

当時の横田忍市長は大学設立に賛意を表し、全面的な支援に乗り出し、そのキャンパスとして現在地をあっせんし、これによって昭和21年11月に戦後初のまた最後の旧制大学法による愛知大学の設立の許可を受けた。同22年、愛知大学の開学とともに日本各地から学生・教授がやってきた。その主体は、東亜同文書院^{けいじょうていこくだいがく}、京城帝国大学^{たいほくていこくだいがく}、台北帝国大学の在籍者であった。

この愛知大学の開学は栄校区及び福岡校区が「軍隊の街」から「学園の街」へとへんぼうする象徴的な出来事であった。



愛知大学正門

(2) 住宅化に伴う商店の発展

昭和20年6月19日の空襲により焦土と化した状態の中で、住宅問題はたいへん深刻であった。国・県・市が一体となってその対策に取り組んだ。

住宅の建設 住宅緊急勅令の公布により、遊

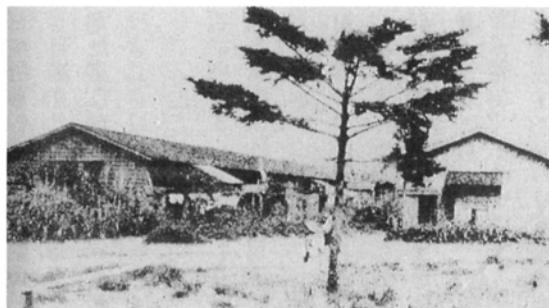
休建築物の強制借り上げの対象として工員寄宿舍・寺院・神社・倉庫・個人所有建築物をこれに当て、住宅に困っている人たちに入居をあっせんするものであった。

さらに、国の対策として昭和20年9月4日「戦災都市応急簡易住宅建設要綱」が発表され、県は「罹災都市応急簡易住宅建設要領」と「同実施要領」を定めて住宅建設を進めた。豊橋市でもこれを受けて、多くの旧軍用施設の住宅転用化が図られた。

南栄町では「高師寮」「南栄寮」の住宅転用と「高師住宅」の新築がされた。

「高師寮」は、昭和20年に陸軍病院高師原分院を板で間仕切り100世帯を収容した。大きさは3種類で家賃は月額8円・6円・5円であった。

「南栄寮」は翌年陸軍病院高師原分院の本館と病棟を改造し120世帯を収容した。この地が後に住宅地となった。これらの場所は、現在通称として「東栄町」^{ひがしきかえ}「新空池町」^{しんからいけ}と呼ばれているが、正式地名は「南栄町字空池」である。



南栄寮

以上の寮は、主として戦災者や海外からの引揚者の住居に当てられた。

「高師住宅」は住宅難をさらに解消するため、市当局より高師原練兵場の軍用地転用の打診を受け、当時の南栄町関係者が将来の発展につながると考え受け入れを決断し、住宅営団の直営で建設された。建物は2～3年後に土地は6～7年後に払い下げられた。建設

された場所は、現在の通称^{きこう}栄生町で経済住宅といわれた。築後60年が経過し、現在昔の面影を残している家はほとんどない。住宅の規模は次のとおりであった。

19.8㎡（6坪）平屋118戸 家賃月額40円

42.9㎡（13坪）平屋16戸 家賃月額80円

以後の南栄町付近での市営住宅建設状況は右表のとおりであり、他地区に例をみない建設状況であった。

昭和22年	18戸
〃 23年	170戸
〃 24年	70戸
〃 25年	80戸
〃 26年	100戸
〃 29年	75戸

住宅団地の誕生 「高師寮」「南栄寮」は使命を終え、昭和30年（1955）ごろまでに取り壊され木造の長屋建の市営住宅が建設された。その後順次鉄筋コンクリート造りに建替えられ一大住宅団地に変身し、現在に至っている。現在南栄町付近にある住宅団地は、次のとおりである。

- 市営栄生住宅 1棟～5棟
- 〃 南栄住宅 A棟・E棟・F棟
- 〃 空池住宅 1棟～7棟



市営栄生住宅

南栄商店街の成立 戦後の大混乱の中で生活苦にあえぎながらも、南栄町関係者は元気に町の再建にとりかかり始め、昭和21年に大蔵省財務局と折衝し、防砂林用地として南栄町が使用していた土地の払い下げを受け開発事業に乗り出した。各組から1名選出し、合計20名ぐらいで建設委員会を構成し、事業推進

をした。

最初の事業は「栄生マーケット」の建設であった。24戸の店舗を建て、戦災者及び引揚者に優先的に分譲するという希望者を募集したところ、高師寮、南栄寮の人たちですぐに満杯となった。昭和23年に24店が一斉に開店した。その様ははなばなしく、南部地区発展の幕開けを告げるかのようであり、すばらしいにぎわいであった。店舗の取扱商品は、生鮮食料品（魚・肉・野菜等）や身のまわり品（衣料品・靴等）を主とする生活必需品であった。



栄生マーケット(昭和54年ごろ)

この栄生マーケットの誕生は地元の人たちに買い物の楽しさを与えるとともに、コミュニケーションの場を提供し町の活性化と発展

に貢献した。このことは建設委員会の人たちに次なる開発へのエネルギーを与えた。

次に建設委員会は田原街道(国道259号線)東側と南部中学校前の道路(県道平井・牟呂・大岩線)沿いで払い下げを受けた土地の開発に着手した。取得した土地は現在の259号線沿いに約4,267㎡(約1,293坪)と現在の平井・牟呂・大岩線沿いに約3,303㎡(約1,001坪)の合計約7,570㎡(約2,294坪)であった。

その土地を次のように割り当てた。公民館用地として「空池^{からいけ}45番地の2」と「森田45番地の2」にまたがる約674㎡(約204坪)と分譲地として24区画で1区画当たり約間口7.2m(約4間)、面積約148㎡(約45坪)であった。

昭和22年11月入札により分譲し、昭和24～25年で全ての家と、公民館が完成した。

これにより国道259号線沿いに、衣料品関係（8店）、飲食店関係（3店）、食料品製造販売関係（10店）、建築関係（7店）、日用雑貨関係（8店）、美容院等（4店）、その他（7店）計47店の店舗ができた。



現在の259線沿いの南栄商店街

このことは、国道259号線両側に街ができ、従来からの商店及び昭和23年にできた栄生マーケットと一体となり、一大商店街を形成することとなった。

その商店街を中心とする南栄地区は当時豊橋の副都心といわれ、にぎわいをみせた。それは愛知大学開学により大学生が増加したこと、商圈として高師原・天伯原の開拓がされたこと、昭和22年から26年まで毎年南栄町の旧陸軍用地に市営住宅が建設されたこと、通学する高校生や一般の住宅増加による人口増、商店街の充実に伴う集客増などによるものである。

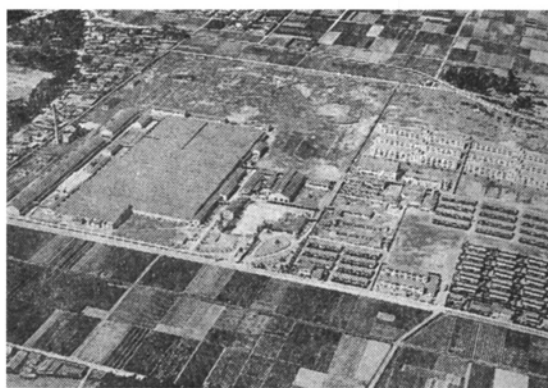
なお、これまでの渥美線の駅は、現在地の路線東側に「分院前」という駅名であったが、駅舎も貧弱で手狭なため、西側に新築移転し南栄駅となった。

大日本紡績株式会社（日紡）の進出 豊橋市が誘致に成功した最初の大企業で、その後進出した大企業誘致の重要な布石となった。

豊橋市は誘致のため、^{あけぼの}曙町の開拓地と他の

土地を合せて約269,400㎡（約81,638坪）と高師駅から工場までの渥美線の引込線用地を無償提供すること、及び工場周りの道路・排水溝を市が新設・改修をし、なおかつ昭和31年までの固定資産税を免除とするとの優遇措置を日紡側（現ユニチカ）に提示した。その結果として昭和25年に誘致に成功したのである。

豊橋市にとり初めての大工場は、昭和26年12月に総工費15億円を投じて完成した。この誘致は南栄町に非常に大きな経済効果を与えた。それは工事のために各地より集まった技術者・作業員がこの地の商店街の客となり、工事完成間近には全国各地より女子を主とする従業員を採用しこの地に集め、単身者は構内の寮に、また家族持ち社員も構内に建てられた社宅に入った。ほとんどがこの地で生活を始めた。その数2,000余人で、その消費は膨大な金額であり、50年余りの長きにわたって南栄町かいはの商店街を支えてきた。



高師原に完成した日紡工場

市街化の進展 日本経済が高度経済成長期に入っている昭和36年ごろの校区の町は次の状況であった。

・「南栄町」 国道259号線（田原街道）、県道平井・牟呂・大岩線南側商店街を中心に広い地域で住宅が存在していた。

・「山田（高師石塚町・山田町）」 規模は狭いが小松原街道沿い南北に350mほどの商店街（山田発展会）を形成し、その付近を中心

に住宅があり、他にあちこちに少しずつ集落化して点在していた。

・「小松町」 商店街は無いが、愛知大学の東側の南北に走っている道路沿いと小松交差点付近の狭い範囲に住宅が存在していた。

・「北山町」 小松原街道の北山交差点を中心に住宅が存在し、他に小さな集落があちこちに点在していた。

・「弥生町」 ^{やよい}ほとんどが畑の状態であり、当時はどこを向いても遠方の景色がよく見え、空気がきれいでのどかさを感じた。

昭和59年（1988）ごろになると全町でかなり住宅化が進み、田畑はまだ多いが校区の半分以上が住宅で埋まった。緑化事業も進められ溜池^{ためいけ}が埋められ公園に変化した。

平成10年（1998）ごろになると校区全域で住宅化がより進み、それぞれの町は主要道路を中心に店が並び住宅が密集し、その範囲も広がりを見せ、とくにマンションの増加が目立ち現在とあまり変わらない状況となった。



小松原街道沿いの小松付近

大型店の進出 1950年代後半から人々の生活に落ち着きがみられるようになった。1960年代初めまで地元の人たちは、日用品は主として地元の店で買い物をし、またその店は多くが専門店（例：衣料品店・八百屋・和菓子店・靴屋等）であり、買い物客同士、また客と店の人たちが互いに会話をし、コミュニケーションの場になっていた。

高度経済成長により消費者の生活水準が向上し、ニーズ（欲求）が多様化したり、自動車の普及で便利性を必要とするなど消費者の買い物の行動範囲が広がった。また女性の社



昭和36年(1961)当時の小松町付近



平成10年当時の小松町付近



昭和36年当時の北山町付近



平成10年当時の北山町付近

会進出により、時間的な便利性を求め、一度に買い物を済ませる傾向が強くなった。

一方商店も消費者の購買心理を察知し、ニーズに応えるために企業形態・販売方法等企業努力をしていた。それは店舗の大型化などである。豊橋へは昭和49年までに5店舗が市の中心部に進出した。

買い物客は、市の中心部へと集まり、にぎわい活況を呈した。

また、昭和50年以降自動車が大衆化して、よりいっそう行動範囲が広がり、郊外の店舗に目を向けるようになった。ジャスコ・イトーヨーカ堂等の大型店7店舗が広い駐車場をそなえて郊外に進出し、多くの消費者を迎え入れた。

この結果、客が郊外へと流れ、市の中心部の買い物客が減少し、昭和52年ごろからドーナツ化（空洞化）現象が始まった。さらに、強い資本力と、種々の経営戦略を持つホームセンター・ドラッグストア・コンビニエンスストアなどが各地に進出し、ドーナツ化にいっそう拍車をかけ、また地元の商店から客を奪った。これらの影響を受け地元商店は売上が激減し、廃業したり、商売替えをする店が発生し始めた。校区の従来型小売店もこの影響を受け、街を歩いているとその厳しさがひし

	事業所数	従業者数	年間商品販売額(万円)
昭和51年	367	1,112	905,653
昭和54年	345	1,056	1,053,682
昭和57年	372	1,101	1,403,144
昭和60年	250	989	1,371,896
昭和63年	250	995	1,346,976
平成3年	242	1,163	1,573,479
平成6年	229	1,047	1,633,248
平成9年	176	950	1,346,735
平成14年			
栄校区	162	1,061	1,900,117
市合計	4,932	35,812	114,755,146
校区割合	3.28%	2.96%	1.65%

※昭和60年以降の数値は「飲食店」の数値が含まれていない。

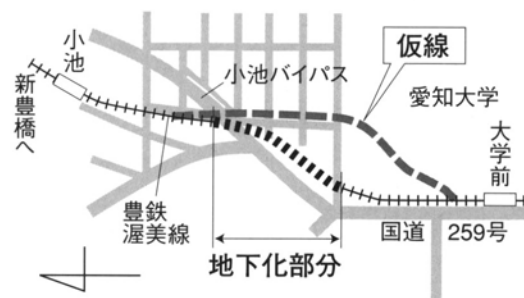
栄校区商業統計調査結果表(豊橋市の商業)

ひしと伝わってくる。

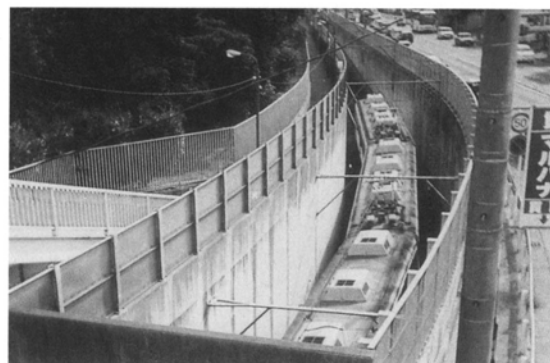
なお、大規模企業店舗法（大店法）と大規模小売店舗法（立地法）の施行も地元商店の活性化への効果は薄かった。

栄校区の状況は豊橋市の商業統計調査結果によると、昭和60年以降事業所数は減少傾向にあり、従業者数はほぼ変わりが無い。また平成14年（2002）の販売額は過去最大となった。これは事業所の規模が大型化したことを表している。しかし、平成14年の市の一事業所当たりの販売額と比べると少なく、それは校区内にとくに大きな事業所が無いことが影響しているものと思われる。

道路の整備 校区を通っている国道259号線（田原街道）や県道小松原・小池線（小松原街道）、同石巻・赤根線（豊橋環状線）、同平井・牟呂・大岩線等の主要道路は^{かくふく}拡幅・改修・舗装・歩道区分等の整備はされつつある。しかし、交通渋滞は依然として解消されていない。また校区内には狭い道路も多数あり、交通事故、防災対策上課題を残している。



渥美線地下地図（東愛知新聞昭和59年7月12日より）



トンネル出口(高師口歩道橋付近)

一方国道259号線小池バイパス建設に伴い豊橋鉄道渥美線を、バイパスの下を通る地下化をした。これにより昭和62年（1987）6月小池—愛知大学前駅間675mが地下化され、両駅の中央部248mが完全にトンネル状となり、県道石巻・赤根線（豊橋環状線）の高師口の踏切交通渋滞が解消された。

(3) のびゆく栄

豊かで住みよい校区に 今まで述べてきたように、この地域は軍隊に依存して発展してきた。大正14年(1925)に15師団は廃止となったが終戦まで軍隊との関係は続いた。その間、昭和7年(1932)には豊橋市に合併され、豊橋市の発展に伴いその影響を受けることとなる。

戦後は、軍関係の施設や敷地には、愛知大学や時習館高等学校、豊橋工業高等学校や豊橋市立南部中学校などが置かれ、学園街の様相を示した。また、住宅難解消のため、市営の住宅が建てられた。そして、広大な演習地

は、開拓地として払い下げられた。

当時この地域は、福岡校区の一部に含まれていた。福岡校区の人口の増加に伴い、昭和27年（1952）に栄小学校が創立され、本栄校区が誕生することとなった。

校区の人口は急激に増加している。昭和50年以降は、幸小学校、中野小学校、つつじが丘小学校の分割による校区の縮小と少子化が人口減少に影響している。

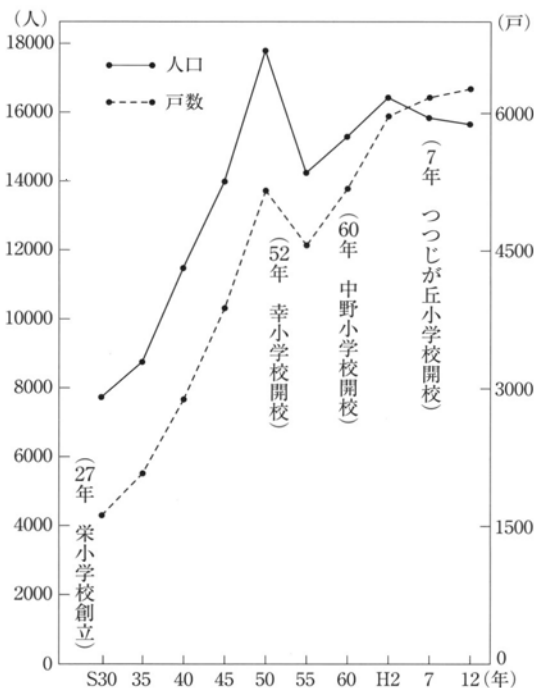


畑の中に建てられた住宅

栄校区は、市の中心部に近く便利であり、また高師原の広い台地が住宅を建てるのに都合がよい。そのため、開拓地として払い下げられ耕地となった土地に住宅が建てられ、急激に市街化し、人口も増加した。

住宅が建てられ、市街化していくにつれ、多くの商店が建てられたり、建て直されたりしている。これらの商店は、駐車場の確保や市の中心部の商店や近くの校区の大型店との関係などの問題を抱えている。

このように急激に住宅地化され、多くの人々が集まってできた私たちの校区が、豊かで安心して暮せるようになるためには、一人ひとりの心の持ち方が大切であろう。



栄校区人口の移り変わり(国勢調査より)



道路沿いに並ぶ商店 北山交差点付近

すみよい校区に — 6年生の作文より—

栄校区への願い 山田 裕子

私の願いは、「昔の苦しかった生活を忘れないで」ということです。

今は生活がどんどん楽になり、食物や洋服などのいろいろな物が手に入ります。でも、戦争が終わったすぐのころは、栄校区は今と比べものにならないほどひどいようすでした。でも、人々は負けずに、一生懸命復活させていきました。思いやりの心を持って、戦争で被害にあった人々のために、住宅を建てたり、子供たちのために考えて、学校を造ったりしました。また、皆が楽しめるように、お祭りを考えたりもしました。

当時の人々は、どんな時でも苦しさに負けず、やさしく強い心を持っていたように思えます。そうした人々がたくさんいたから、町は発展したんだと思います。

今、栄校区に住んでいる人々も思いやりの心を持って、物事に取り組んでほしいと思います。

そうすれば、争いは無くなるし、困難が訪れても乗り越えていけると思います。

「栄(える)」校区に 永瀬 瑛野

今まで社会科の学習で、米屋さん、パン屋さんやちくわ屋さんなどに昔の話を聞いてきました。

空襲で建物が燃えたりして、とてもたいへんだと思いました。けれど、お金もないのに、復興のために商店街を造る計画をしたり、学校を造ったり、人々の楽しみのために祭りを開いたりしてきました。昔の人はとてもすごいと思いました。

これからの栄校区の人たちは、昔の人がつくりあげてきた小学校や祭りなどを守り育て

て、住みやすい校区にしていきたいです。そして、他の校区の人たちに「栄校区は、交通が便利で、環境がよいので、住みやすい所だから、私も住みたいなあ」といわれるようにしていきたいです。

栄校区の名前の、「栄(える)」のように、たくさんの人でにぎわって、たくさんの人から好かれる校区にしていきたいです。

明るく楽しい校区に 尾崎 愛恵

「栄」はどうしてできたのか？栄のゆらいの勉強をしていろいろ分かりました。子供たちやPTAの人たちが考え、子供たちの「栄える」がいいという意見で、「栄小学校」になったそうです。

せっかく子供たちの意見でなったのだから、明るくて楽しい子供がいっぱいの校区がいいです。

そして、お年寄りもいっしょに楽しく生活できる校区になってほしいです。お年寄りを手助けすれば、「ありがとう」と言ってくれるし、おたがい心と心がつなぐおまじないみたいに、気軽に話せるようになるといいです。

皆が楽しく明るく生活できる校区を願っています。



校区のあゆみを追求する子供たち

第3章 教育と文化

1 福岡小学校へ通ったころ

今までの章で述べてきたように、今の栄校区になったのは、戦争が終わってからの昭和27年（1952）からである。それまでは校区の人々は福岡小学校に通っていた。そこで、福岡小学校の移り変わりについて述べることにする。

橋良学校のころ 明治5年（1872）の学制公布以前の教育機関は藩校（武士の子弟教育のため諸藩が設けた）と寺子屋（庶民の子弟のために読み書きそろばんを学ばせた）があり、幕末のころの豊橋地方には約250余りあったといわれている。

学制公布に伴い、明治7年3月22日、橋良村正光寺に第10番小学高足学校（今の高師小学校）出張所橋良学校が開校された。その後同11年1月、高足学校から独立して福岡学校が誕生した。



橋良学校の運動場

そして、同年4月、橋良村東郷に校舎を新築し以後53年間、この東郷の地に学校が置かれた。

一時明治15年に、山田、小松、小池を通学区とする松池学校まついけが小池村に設立されたが、同18年9月には、福岡学校に合併された。

明治19年に小学校令が公布され、尋常と高等に分け、尋常4年間を義務制とした。それに伴い磯辺学校いそべと合併して、渥美郡尋常高等小学福岡学校と改称した。福岡学校は本校、磯辺学校は分教場とした。

このころの学校は、授業料を毎月納めていた。服装は、着物と袴やぞうり姿だった。そして、修学旅行が始められたり、他の学校との連合運動会も行われたりした。また、卒業してから学問のうさんや農蚕業の知識を深めるということもあって、夜学会も発足した。指導では、教育勅語ちよくごが重要視されたり、天皇、皇后両陛下ごしんまいの御真影が大切にされたりした。福岡学校では、生徒の向上心を高めたり、父兄との結びつきを深める指導の工夫が重ねられ、新聞の発行などに力が入られ、参観の先生が絶えなかった。

現在の地に移ってからの学校 福岡学校の生徒数は年々増加し、明治33年に新校舎が建て



移転当時の校舎

られ、盛大に祝賀会が行われた。

明治41年（1908）第15師団が、高師村に設置された。それに伴い、生徒も急増し、教室の増設や二部授業でやりくりした。

その後、大正14年（1925）の15師団の廃止により、軍の諸施設の中には使わなくなったものもあった。そこで、校舎の移転計画がすすめられ、昭和6年（1931）には、騎兵第19連隊跡に新築校舎が完成し、盛大に移転新築落成式、祝賀運動会が行われた。

戦争は満州事変から日中戦争へと発展していき激しさを増していった。学校でも出征兵士の見送り、慰問文の作成や陸軍病院への慰問などが行われるようになった。

そんなおり、昭和16年、「国民学校令」が施行され、豊橋市福岡国民学校と改称され、尋常科は初等科となった。自由主義・個人主義という言葉は嫌われ、団体訓練や錬成という言葉が多く用いられ、団体行動や駆足訓練が強いられるようになった。

昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まった。決戦体制下では、遠足・学芸会・修学旅行などの行事は中止され、高等科の児童たちは工場動員され、各地の工場で働いた。校庭は掘り起こされ、芋やカボチャなどの畑に変わった。警戒警報や空襲警報が毎日発令され、その都度授業は中止された。同20年6月19日夜、豊橋が大空襲を受け、校区でも戦災学童700名、死亡児童10名の被害を受けた。校舎も一部焼けた。

昭和20年8月15日、ポツダム宣言受諾により、戦争は終わった。学校教育も教育基本法や学校教育法が公布され、新学制による6・3制が施行され、9年の義務教育となった。新学制実施に伴い、豊橋市立福岡小学校と改称され、男女共学となった。学校給食の開始、校歌の誕生、PTA結成などアメリカの制度を導入して急速な発展をして移り変わってい

った。なお、福岡小学校の鉄筋校舎化はその後の昭和36年からである。

戦後の県や市の住宅政策により、児童数の急激な増加に見舞われ、適正規模の学校にするために、昭和27年（1952）4月、栄小学校が分離独立した。

このような移り変わりを通して、私たちの栄小学校の教育が始まったのである。

福岡小学校から栄小学校へ

戦後まもなく、福岡小学校へ入学しました。松林を通り、工業高校横の大きくて深い側溝は旧師団の名残のままの通学路でした。学校の校舎や設備は十分ではありませんでした。

5年生の秋、教室が不足し、工業高校の一部を借りて学びました。それでも教室は不足し、青空教室でも学びました。6年生になったら新しい学校へ移るという話を聞き、うれしさの反面、仲良しの友達と別れることで複雑な気持ちでした。

昭和26年の冬、栄小学校の棟上式に参列しました。翌年4月、身も心も校舎も廊下もびかびかで移りました。教室に入ると明るく暖かく窓から外の景色は松林と畑ばかりで、小鳥の音が祝っているように聞こえました。最高にうれしかったのは、机といすがちゃんと私の分まであったこと、教科書も一人ひとり与えられたことです。

給食のごちそうに鯨のステーキができましたが、脱脂粉乳のミルクは大嫌いでした。体育の時間には、校庭の石ころ拾いをしました。

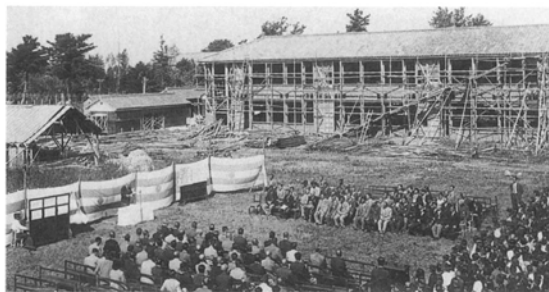
あれから半世紀以上が過ぎた今、栄小学校第1回卒業生の写真を見ると、1・2・3組皆んなの顔は、豆粒のように小さいけれど、一人ひとり宝石のように輝いています。

—栄小学校第1回卒業生 吉田彌榮さん—

2 栄小学校の移り変わり

たった一棟の木造校舎から 昭和27年(1952)に福岡小学校から分離独立して開校した栄小学校。開校当時の栄小は、木造二階建ての校舎一棟で、児童数は1,047人、19学級として55年の歴史が始まったのである。

子供たち全員を受け入れることのできる場所が無かったので、豊橋工業高校の教室を借りたり、「青空教室」として野外で勉強したりしていた子供たちにとって、新しくできた栄小学校は、宝物のように大切な学校であった。



建築中の校舎をバックに式典(昭和27年)

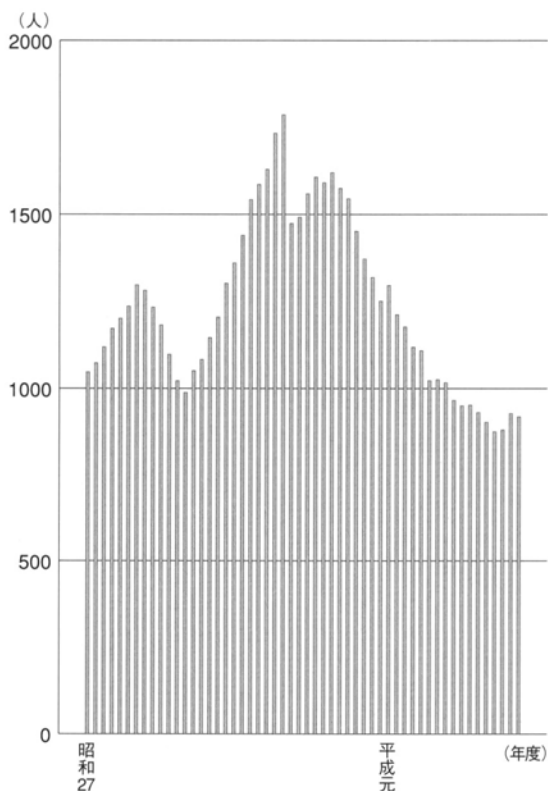
同30年に増築校舎(C棟)が完成し、35年には待望のプール(現在の前のもの)もでき、43年には鉄筋校舎(現中校舎)が完成し、46年に体育館が完成した。

その後も、児童数の増加に合わせて鉄筋校舎が順次増設され、昭和56年には今の鉄筋校舎3棟(北、中、南校舎)となり、木造校舎は完全に姿を消した。児童数が最も多かったのは、同51年の1,786人、44学級であった。翌年、幸小学校が開校し、分割された後も、



現在の学校風景

昭和60年の中野小学校開校、平成7年(1995)のつつじが丘小学校開校と計3回の分割が行われてきた。



児童数の推移

「栄小学校」校名の由来

元山田石塚町副総代 小田武康氏

「栄」の由来は総代会、PTAの間で議論され一般区民にもいろいろな情報が流れてきました。南栄方面にあるから「南栄」小学校では。また、昭和27年に大東亜戦争の講和条約が締結されたのに因んで「成和」小学校ではどうか。また、所在地が町畑町字森田だから「森田」小学校では。三つの名前を聞いたことを思い出します。

子供たちからも意見を聞いたらということで、「さかえる」子供の「さかえ」がいいということになり、満場一致で「栄」に決まったと聞いています。

輝かしい歴史と伝統 生まれたばかりの栄小学校では、最初の年からいろいろな行事が行われた。物も無く、人手も少ない時代だったが、みんなで工夫しながら行事を盛り上げた。

例えば、学芸会は家庭科室を使って行い、みんな畳に座って合唱や劇などを鑑賞した。当時のレコードは手回し式の小さなもので、交替で一生懸命回したとのことである。



手作りの短パンでがんばった運動会

また、創立当時は、勉強でもスポーツでもまだ自慢できるものがなく、子供たちも先生も、「一番になれるものをつくろう！」とがんばっていた。

栄小が初めて一番になったのは、野球だった。藤原先生の指導の下、運動の得意な男の子たちが中心になって結成した野球チームが、市内大会で初出場・初優勝した時には、学校全体が喜びに沸いた。



初めての一番

昭和45年（1970）、種井先生が指導して校区の中にきれいな花壇を作り、全国で開催されていた「フラワーブラボーコンクール」で愛知県知事賞・文部大臣奨励賞を受賞した。学校だけでなく、校区も花いっぱいになり、校区全体の自慢だった。

校歌に寄せて 愛校心をもとに

校歌作詞・作曲者 山田直美氏

本校は陸軍兵器廠しょうの跡地で、松の緑に包まれた校舎は木の香りも新しく、清新の気をおのずと感じさせる申し分ない環境にありました。当然のことながら希望と意気に燃えた開校でありました。

そんな気持ちと、校名のごとく栄え、栄えていく栄小学校への願いを込めて校歌の作詞、作曲をしました。

これまで学校は、一つ一つの業績を積み上げながら栄え栄えて発展してきました。この歴史は尊いものであります。これからも輝かしい業績と伝統を積み重ねながら校歌が歌い継がれてゆくことを願っています。

校訓「生きる勇氣と力と夢を」に寄せて

第9代校長 八田誠二氏

私は昭和61年4月に本校の校長となり、校訓として「生きる勇氣と力と夢を」を掲げました。なぜ、この言葉なのか？

それは、人間として成長していく、その大もとである小学校教育の中で、しっかりしたものを身につけなくてはならないのに、その中心となるべきものに関心もなく過ごしてしまった私自身の反省から、この言葉の提示となったわけです。

子供たちの生活のすべての言動が、最後にはここに集まり、発展していくという道すじにしたいという願いを込めたものです。お父さん、お母さん、先生も、子供たちとともに、毎日の生活の一つ一つが勇氣となり、力となり、夢となって次へと挑戦・発展していけたらいいなと願い、設定しました。

生きる勇気と力と夢を 本校の教育目標は「生きる勇気と力と夢を」である。その目標のもと、平成15年（2003）から3年間、「共に学び合い高め合う子」を求め、子供の視点に立った授業づくりを中心にした研究に取り組み、その成果を平成17年11月8日に発表した。「生きる勇気と力と夢を」を育んでいくことこそが、これからの時代を生きていく子供たちには必要であり、栄小学校の教育に自信を深めた3年間となった。



研究発表会

校区民の熱い思いで開校して半世紀以上、輝かしい歴史と伝統を築いてきた栄小学校。巣立った卒業生は一万人を超えており、地域をはじめ、全国の各方面で活躍している。学校と地域が一体となり、未来に向かってさらなる飛躍を目指してまいしんしている。

10年後の栄小学校へ 6年 石川裕祐

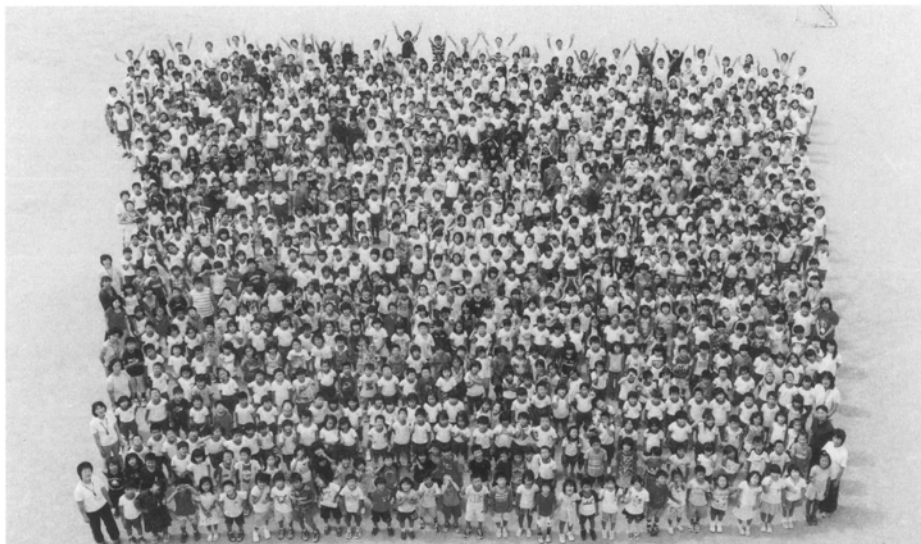
僕は、10年後の栄小学校には、ソーラーパワーを利用した温水プールができていて、一年中泳げるようになっていたり、パソコンを使った授業がもっと多くなり、勉強の仕方も変わっていたりするだろうと思います。

でも、黒板は残っていてほしいです。学校は先生や仲間とふれあいながら勉強し、成長していく所だと思うからです。

また、栄小学校の子供たちのよさは「あいさつができる」ことなので、いつまでも校風として続けていってほしいと思います。

そして、自然がいっぱいの学校になってほしいと思います。これ以上、地球温暖化が進まないようにしなくてはいけないし、校庭にいろんな植物の実がなっていたら楽しいと思うからです。

最後に、体育が苦手な僕でしたが、友達のアドバイスをきっかけにして水泳教室にも通い続けたことで、「水泳だけはできる」という自信が持てるようになり、今の自分の支えにもなっています。後輩の皆さんも、少しでも興味を持てるものを見つけた時は、「自分を成長させるチャンス」と考え、とにかく挑戦してみてください。



小さな笑顔に 大きな希望をこめて 健やかに育つ栄っ子

豊橋市の南部地区かなめの要となる南部中学校

昭和22年（1947）に南部第一中学校として開校した。当時の生徒数は、763名であった。翌年、南部第一中学校と南部第二中学校が統合し、南部中学校が誕生した。生徒数は、1,535名となった。翌24年に南部中から分離し南稜中学校が開校した。その後も生徒数の増加に伴い、昭和49年に高師台中学校、さらに同60年に南陽中学校が開校した。

南部地区の中学校は、南部中学校が出发点であり、要である。

校章や校歌の誕生



昭和25年に校章制定。

「南」を若鳥が翼を広げた姿に。

昭和26年「南中を讃える歌」制定。

平成6年に校歌に。

伝統ある南部中学校 南部中の歴史を振り返ると伝統校としての重みを感じる。学習活動や部活動等での輝かしい実績が目につく。

部活動関係では、全国大会に出場しすばらしい成績を収めている。全日本バレーボール選手権でベスト8（昭和46年）、ハンドボール女子準優勝（昭和47年）、同ベスト8（平成17年）、剣道準優勝（昭和62年）、野球ベスト8（昭和62年）などがある。個人種目でも、陸上競技、水泳競技、女子ソフトテニスなどで全国大会に出場し輝かしい成果を残している。現在もその伝統「南部魂」を受け継ぎ、各種大会ですばらしい成績を収めている。

一方、研究分野では、保健体育研究発表会（昭和28年）、生徒指導研究発表会（昭和50年）、格技・剣道研究発表会（昭和63年）、愛知産業教育（技術・家庭）研究発表会（平成17年）などの実績がある。



全国大会準優勝の女子ハンドボール部

伝統を受け継いで 今まで述べてきたように、学習や部活動などで生徒の活躍が目につく。それは、生徒が自ら求め事にあたるという活力ある学校づくりの伝統によるものであろう。ここで、現在行われている特色ある教育活動の一端を紹介する。

まず、個に応じた指導を重視し、数学、英語、理科では、少人数指導を行っている。数学と英語は、1学級を2グループに分けて授業を進める。また、理科においては、1学級を2名の教員で教える方法をとっている。一人ひとりの学力向上に成果も出ている。

次に、地域で学ぶ学習を工夫している。生きる力を育む職場体験学習として、平成11年度より職場体験「南部インターンシップトライやる」（通称NIT）を実施している。これは、生徒が社会性を身につけるとともに自ら考え、進んで行動できるようにしようというねらいである。この体験により、一回り成長した生徒の姿が見られるようになった。

また、ボランティア活動も活発に行っている。平成11年より校区にあるなまづいけ鯉池の清掃活動が始まった。現在は、福祉施設での活動、校内での美化活動へと広がりを見せている。

一方、地域の人材を活用した選択学習を、平成9年度より開始、継続している。

平成7年に「ONE FOR ALL ALL FOR ONE」が誕生した。今後もこの気持ちと伝統ある「南部魂」を受け継ぎ、地域と共に成長する学校でありたい。

3 ふるさと再発見

神社は鎮守の森の氏神様（お宮様）として親しまれ、村の守り神として崇敬されている。これらの神社は、村の有力者（例えば庄屋）が社を建て神様をまつり、村の安全（無病）祈願をしたのが始まりである。校区には神社をはじめ昔から今日まで残っているものがある。以下記録の抜粋を中心にして記述する。

諏訪神社（鎮座地 山田町）



諏訪神社

- ・祭神：^{たけみなかたのおおかみ}建御名方命
- ・由緒
^{えいしょうねんじゅう}永正年中（1504～1520年）三州今橋城主牧野成時（古白）がこの地に一社を建て諏訪大明神として崇敬されてきた。後に諏訪神社となる。
- ・神社創建の場所
地元の言い伝えによれば「小高い森に良く日が当たる場所あり、そこから東に石巻山を仰ぎ、西に三河の海（三河湾）を眺め、南に広い太平洋を望み、北に本宮山を拝む、まさに最適な場所である」といわれている。
- ・境内にある御末社
秋葉社（防火・鎮火）・^{いなり}稲荷社（五穀豊穡・商売繁盛）・大黒社（無病息災）・^{おくわ}御鋤社（農機具）・天神社（学問）
- ・氏子数2,400戸有余（山田町・高師石塚町・つつじが丘1丁目から3丁目）

一厘鳥居（諏訪神社） 大規模な製糸業者の鈴木製糸（山田町）の従業員たち約350人が昭和3年から同6年にわたる3年間、毎日1人1厘ずつ積み立て、石の鳥居を奉納したと鳥居に刻まれている。総額は約400円ぐらいで、当時の従業員の生活を考えるとたいへんな金額であった。

小松神社＝神明社（鎮座地 小松町）



小松神社

- ・祭神：^{あまてらすおおみかみ}天照大神（伊勢神宮の御分霊社）
- ・由緒

創建は万治2年（1659）の小松新田開発に際し村内の安全と五穀豊穡を祈願して創祀したと伝えられる。明治制度改めにより村社に列した。

- ・氏子数550戸有余

道標の働きもした小松神社のお灯明（通称常夜灯）

その昔、小松神社付近に旧小松原街道があり、当時この街道は、^{とうかんのんじ}東観音寺参りなどでにぎわっていて、その人たちの道案内をした大切なお灯明であった。

このお灯明は前面横石は「秋葉山」・石柱に「村中安全」と刻ま



小松神社のお灯明

れており、当時の面影を残している。町では神事として秋葉神社の大祈禱祭に代参し、

御神符(秋葉神社のお札)を受け、町内の火災消除安全を祈願している。

進雄神社(鎮座地 南栄町) p.17参照

- ・祭神：進雄命
- ・由緒

元禄11年(1698)森田新田の開発がなり、その鎮守として高師村東浦10番地に一社を建立して牛頭天王を奉斎した。その後明治になって、進雄神社と改め村社に列せられ、諸事情により現在地に遷座し奉ることになった。

- ・境内にある御末社

秋葉神社

祭神：火産霊神

空池天満宮

祭神：菅原道真(天神様) 学問の神様で、大宰府天満宮(福岡県)より御分霊社を拝受し、ここに遷座し奉った。祭日は1月第2日曜日である。

- ・氏子数1,350戸有余(栄生町・東栄町・新空池町・南栄町)

北山神明社(鎮座地 北山町)



北山神明社

- ・祭神：天照皇大神、火産霊命
- ・由緒

明治40年(1907)この地域の開発に一社を設けて産土神をまつる。昭和24年(1949)

1月26日神社庁へ届け出る。

- ・氏子数1,240戸有余

高師原神社(鎮座地 弥生町)



高師原神社

- ・祭神：天照坐大神
- ・由緒

高師原の地で開拓団を結成し、団員の心の御柱として皇大神宮の御分霊をこの地に奉斎した。平成5年(1993)7月宗教法人高師原神社を設立した。

- ・氏子数2,000戸有余

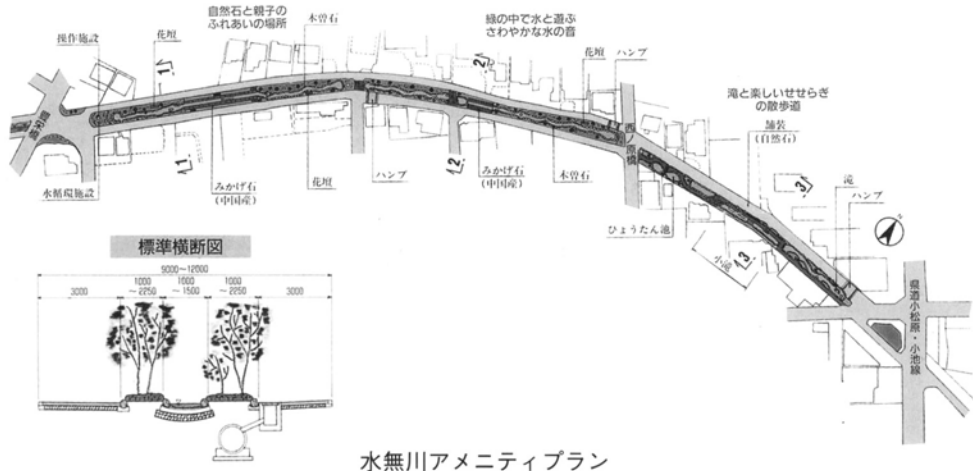
水無川と山田川 昔高師原に雨が降ってきた川で、次のような貴重な働きをしている。

・農業用水 二つの川の一帯は水田が広がっていて、これらの川を利用して水を引き込んでいた。山田川は延長1,410mで中山田池(現在の南部地区市民館と中山田池公園)を起点に西北の方向へ流れ柳生川へ合流する。水無川は延長1,130mで清水池(幸小学校北)を起点に西南の方向へ流れ昭和池に入る。

・排水路 都市化して川が整備され、大雨の時増水で川のはんらんによる被害を防止して



水無川



水無川アメニティプラン

きた。

・地域の生活と結びついた場所 水無川は清水池から小松原街道までの700mはコンクリートの蓋をかぶせ道路の一部として利用している。小松原街道より西側約400mにかけては、アメニティプラン（市の整備事業・図参照）により二層河川構造にして、下部は排水路とし、その上部を河川としての姿にとらわれない水景としての流れをイメージし「せせらぎと緑道」をテーマに整備された。現在幼児が水遊びをしたり付近の人たちの楽しく語らう姿が見られる。また、山田川も一部蓋をかぶせ、道路の一部として利用されている。空襲に備えた防火水そう 昭和18年（1943）の末ごろ、各地に防火水そうが造られた。現在の南栄住宅の片隅に六角形をした古い水そうが残っており、眺めていると昔がしのばれる。現在、水そうの上は危険防止のため金網がかぶせられ、防災対策上防火水そうとして利用されている。



今も残る防火水そう

^{ごんじゅう}浅野権十の石碑 明治政府が安定した財政収入確保のため地租改正令を公布した。これを受けて当時の福岡村村長であった浅野権十は地租改正及び戸籍の編纂をし、村内に徹底させた。その功績等をたたえ、また記念して明治28年（1895）3月に現在の高師石塚町の小松原街道沿いの一角に建てられた。



浅野権十の碑

赤レンガの建物
（コンドーパン）

国道259号線沿い（昔の豊橋陸軍兵器^{しょう}廠西門前）にあり、所有者は近藤久夫さん（コンドーパン蟹原店主）でコンドーパンの名前で親しまれている建物である。先代が大正13年（1924）に建てたもので、建物の面積は66㎡（20坪）ですべてレンガを使って建られている。奥様が次のように話してくれた。



赤レンガの建物

先代の奥さんが膨大な数のレンガを水で洗い、さらに磨く作業を繰り返すという気の遠くなるような準備をした。それを左官屋さんが組み合わせ・積み上げていく作業で、バランスよく安定した技術が要求され、特に軒下と窓の飾りは特別な技術を要した。

三河地震・東南海地震にも耐え現在も生き続けている貴重な建物である。

4 総代会と校区の活動

豊橋市に総代会が生まれたのは、市制がひかれた明治39年（1906）のことである。

以降町総代会は、町民の代表機関として市政に大きく貢献してきた。

本市の自治組織の一大特長は、小学校の通学区域を単位とした総代会を設置、その下に町総代会を組織して、町民と市政のパイプ役を担ってきていることである。

校区の安全と活性化 栄校区の総代会は、次のような活動を行い、校区全体の安全と活性化に活躍している。

栄校区総代会の主な活動

- ◇「広報とよはし」など、市からの依頼業務の実施
- ◇「自主防災組織」の編成などによる地震など災害から校区民を守るまちづくり
- ◇「栄小学校区青少年健全育成会」の設置による健全育成の見守り
- ◇「防犯パトロール隊」の結成による防犯活動
- ◇「通学路のセーフティマップ」の作成などの安全活動
- ◇「栄校区まちづくりを考える会」による校区参加の安全で明るいまちづくり



校区防災訓練

本校区総代会の活動内容を「栄校区まちづくりを考える会」でみると、市民参加の勉強会であり、参加者は平均45名程度で、校区民の関心の高さを知ることができる。

なかでも、「地元愛知大学を知ろう」の活動には、とくに大勢の参加者があった。高師石塚古墳や旧師団司令部・師団長官舎などを見学し、校区の歴史の一端に思いをはせる人たちも多かった。また「とよはし100祭」まちづくり活動サポート事業として「さかえ歴史・自然の道」の創設が認定され、平成18年（2006）末を目標に作業をすすめている。

そして、栄小学校区青少年健全育成会は、校区内の町総代会及び各種団体の代表、学校職員、PTA役員などで構成し、児童たちの健全育成活動を行っている。

例えば、「大きな声であいさつできる子」のスローガンで、毎月校門前で子供たちと一緒に「あいさつ運動」を行っている。

このように、総代会を中心に安全で明るいまちづくりをめざして活動している。とくに、長寿社会を迎え、高齢者の活動への貢献は著しいものがある。さまざまな問題が起きている今日、とくに校区誕生が新しく、急激に流入人口が増加した栄校区においては、総代会を中心とした校区民のつながりとともに、住民一人ひとりの心の持ち方が大切になってくるのではないかと。

おわりに

豊橋の市制100周年を迎え、各校区で、あゆみをまとめることになりました。

本校区は、歴史も浅い上に、戦前まで多くが原野でした。そのため、資料の入手が難しく、プロット段階から苦勞の連続でした。そこで、限られたページ数の中で時代の流れを背景にして、豊橋全体や分割前の校区の福岡のあゆみを含めてまとめることにしました。

慣れない私たちの執筆ですが、多くの方に資料等のご協力やご指導・ご支援いただき、執筆することができました。感謝申し上げます。また校区内でも、入手できる資料に片寄りがあり、自分の住んでいる地域の記述が少ないと感じられる人もあると思いますが、ご理解ください。

自分たちの生活する校区や発達のようすを知り、親しみを持っていただき、地域の発展の一助となれば幸いです。

■編集委員

西 義雄	鈴木 八成	石垣 純孝
坂上 治康	犬塚 幸弘	塩澤 正夫
増田 隆雄	伊藤 眞孝	大武 鴻介
望月 宏隼	吉田 彌榮	

参考文献

「南栄町物語」 水口源彦

「豊橋市立栄小学校50周年記念誌」 栄小学校

「福岡 むかしと今」

豊橋市立福岡小学校校区誌編集委員会

「高師風土記」 高師風土記刊行委員会

「愛知大学五十年史」 愛知大学

「とよはし地学めぐり」 とよはし地学同好会

「東三河めぐり」 吉川利明・東三文化会

「豊橋めぐり」 吉川利明・東三文化会

「図説東三河の歴史（上巻）」 郷土出版社

「愛知県の不思議事典」 新人物往来社

「標準日本史年表」 吉川弘文館

「世界各国史XIV日本史」 山川出版社

「角川日本史辞典」 角川書店

「愛知県神社名鑑」 愛知県神社庁

「三河風土記」 豊橋文化協会

「とよはしの歴史」 豊橋市役所

「豊橋の史跡と文化財」 豊橋市教育委員会

「ふるさと豊橋」 豊橋市校区社会教育連絡協議会

「がんばろうね 豊橋が輝くとき」 豊橋市

「豊橋市消防年報」 豊橋市

「東三河読本 拓けいく東三河」

東三河読本編集委員会 豊橋市教育委員会

「豊橋市政八十年史」 豊橋市

「豊橋市史」 豊橋市

順不同

校区のあゆみ 栄

平成18年12月25日発行

編集 栄校区総代会
栄校区史編集委員会

発行 豊橋市総代会

印刷 共和印刷株式会社

R2100
当紙製本率100%の再生紙を
使用しています。

PRINTED WITH
SOY INK
Soy Inks of American Soybean Association

